

独立行政法人国立科学博物館に係る業務の実績に関する評価（平成13年度）

全体評価（法人全体を評価）

評価項目	評 価 の 結 果
事業活動	<p>国立科学博物館が果たすべき役割・機能のうち、社会教育施設としての展示活動、教育普及活動及びナショナルセンターとしての活動等国民に対するサービスの提供を確実に推進しているとともに、研究施設としての研究活動についても活発な活動を展開しており、中期目標の達成に向けて着実に成果を上げている。また、新館 期展示場の整備についても、公開に向けた準備作業を計画的かつ順調に準備が進められている。なお、国立科学博物館の重要な機能である標本資料の収集については、今後の在り方を具体的に検討する必要がある。</p>
展示活動	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究成果を生かして、多くの人に親しまれる展示が展開されているか <p>研究者の解説や理解しやすい展示を心がけ、展示に様々な工夫を凝らすなど、常設展示の充実や数多くの特別展を数多く開催することにより、特に常設展示を中心に入館者数の増加を果たし、多くの入館者に満足してもらう努力がなされた。</p> <p>13年度の総入館者数は、前年度比1%増、過去5年度の平均に比べ5.1%の増であった。これは、全国的に博物館等への入館者が減少傾向（「博物館白書（平成11年度版）」によると51.6%の館が「減少傾向」、30.0%が「変わらない」、13.5%が「増加傾向」と回答）にあるにもかかわらず増加している。これは、広報活動や入館者数の確保のための様々な工夫や方策を講じた結果であり、館としての努力が十分に認められる。また、期間を限定した子どもの無料入館を実施し、子どもの入館者数を増加させたことは評価できる。</p> <p>児童への対応、バリアフリーをはじめ、ユニバーサルな空間創造は今や常識となっているが、その対策についても良く改善努力がなされている。今後も快適な鑑賞環境の形成について積極的に取り組んでほしい。</p> <p>21世紀において環境、自然保護は特に注目される分野であり、この分野での国立科学博物館の貢献はさらに注目されていくと考えられ、新館 期展示場の整備については、新しい時代のニーズを踏まえて新館の常設展示の見直し作業を始め、最先端の研究成果の反映、最適な展示手法の検討、優れたテーマ展示となるようにメッセージ性を強調すること、見学者にとってわかりやすいものになる工夫などを中心に展示内容の検討を行ったことは高く評価できる。また、新館 期の展示内容が多くの人に親しまれる展示となるために、外部有識者によるプロジェクトチームを設置した。新館 期展示については、近年大きな課題となっている国民の科学・理科離れへの対応など社会的な意義も大きく、期待を寄せている。</p> <p>なお、新館が整備されることにより、長期間更新していなかった本館の展示について、研究部が35年にわたって調査研究を続けてきた「日本列島の自然史科学的総合研究」の成果を基に、日本の動植物、地学、日本人の起源等の総合的な展示とする整備計画を検討中であることだが、目指す方向が明確かつ具体的で分かりやすく注目していきたい。</p> <p>アンケートの実施や魅力ある展示の工夫に努力は見られるが、アンケートについては、来館者にインタビューするなどもっと積極的に取り組むべきであり、また、入館者のニーズ分析が必ずしも十分ではないが、参加体験型展示を増やしたことについては評価できるので、さらに充実を期待したい。</p> <p>特別展等を13回実施するなど大変な努力を払い、特色ある展示活動を幅広く実施した。諸外国との博物館等や企業などとも連携するなど優れた企画による魅力ある特別展を数多く開催し、様々な展示方法を駆使し入館者数を増やす努力が全館をあげて実施されたといえるが、結果として特別展への入館者数が伸びなかったことは残念であり、今後原因分析を行い、企画に反映する必要がある。特別展等毎に入館者数の目標設定を試みることも重要である。また、企画の段階から来館者のニーズに視点を置き、質の高い展示、教育普及サービスの提供や評価の高い解説目録を作成したことは高く評価でき、今後も引き続き実施されることを期待したい。なお、職員がオーバーワークとならぬよう十分な配慮が必要である。</p> <p>13年度実施された特別展等において、参加体験型展示を多く取り入れたり、研究官によるギャラリートークや民間との共同研究による展示を作製するなど、展示手法等の工夫が見られる。また、科学研究費特定領域研究の成果を展示に反映した特別展では、多くの他の機関の研究者の協力の下に実施し、研究者間の連携のもと充実したものとなっている。さらに、時宜を得た企画として「ねつ造石器事件」など、現在社会で話題となっていることをタイムリーに展示に取り入れている。また、特別展等の解説図録を単行本化したことについては、普及・経営の両面で評価される良い発想である。</p>
教育普及活動（研修を	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生涯学習推進のモデル機関として、青少年をはじめとした国民各層の知的欲求に応える教育普及活動、研修活動及び学習資源に関する情報提供活動の充実が図られているか

含む)

教育普及活動については、子どもから大人まで幅広い層に応じた学習機会を提供する教育普及事業を延べ766日(前年796日・過去5年間平均776日)実施し、延べ49,056人(前年39,806人、過去5年間平均41,729人)が参加した。教育普及活動への参加者数については、生涯学習に相応しい、あらゆる層を対象にした多様なプログラムの設定が多く参加者を集めたと考えられる。さらに、展示と教科指導との関係(学習指導要領との関係)を整理して、学習の体系化を図るなど学校教育との連携を深める活動を期待したい。

なお、参加機関や対象者が限られていないが、高齢者向けプログラムは十分か、など、課題も見受けられるので、新しい試みの検討を期待したい。

研修活動については、博物館職員や学校教員、学芸員・青少年教育施設指導員を対象とした講座を多く開催し、全国の学芸員等の資質向上等に貢献したことは高く評価できる。特にミュージアムマネジメント研修は組織・運営・財政的分野と幅広く、今後さらに重要となる研修である。また、文部科学省が推進する教育情報衛星通信ネットワーク(エル・ネット)を活用し、博物館関係職員研修、科学史学校等の教育普及事業を送信するとともに、エル・ネット子ども放送局での「研究室におじゃまします」の企画制作をはじめ、56番組を放送するなど放送番組での幅広い活動については高く評価できる。

教育普及活動や研修活動でのアンケート調査で、受講者の満足度や要望を調査している(教育普及活動については、抜粋して実施)が、概ね8割以上の参加者から満足であったという回答があり、参加者の満足度は非常に高いものとなっている。科学教育指導者や教員、学芸員等を対象とした研修においては、学校、博物館等における受講者の業務に研修の効果が期待できる。

学習資源に関する情報提供活動については、バーチャルミュージアムとして恐竜、特別展、宇宙の質問箱は時宜を得ているものの、保有する豊富な標本資料等の電子化を進め、マルチメディア技術とインターネット等の情報通信技術を活用して、学習資源として国民に提供することによって、学校教育及び社会教育に活用できるように更なる充実を求めたい。ホームページの充実についても、子ども対象のQ & Aは人気があり効果的である。標本資料の公開は全国的に有用であり、良い効果をあげている。

また、ティーチャーズセンターでの相談事業は、教師に対する国立科学博物館利用のノウハウと教師自身の教育実習体験学習として効果的であり、総合的な学習の時間への対応などますます事業の充実と新たな取組が期待できるところである。また、教育プログラムの開発については、科博の専門家と教育関係者を入れた委員会を設置したことは評価できる。今後、全国の先導的なプログラムを意欲的に開発することが望ましい。

貸出用教材実習セットについては、毎年新規開発し、これらを学校や博物館等社会教育施設に積極的に貸し出すことにより、日頃実物標本に接する機会の少ない児童・生徒等に対する教育活動を支援している。貸出し数が前年度と比べ大幅に増加していることは高く評価できる。今後、ニーズはさらに増加すると思われる、新たなセットの開発を行うとともに利用についての広報活動も重要である。

教育ボランティアについては、国立科学博物館の特徴とする活動であり、歴史的、人数的にも、また、活動状況や研修制度も年々改善・充実してきている。今後さらに、教育ボランティアが持つ専門性、創造性を開発し、発揮できるような研修や学習の機会を提供し、活動の場を作ることによって、博物館利用者への多様な学習機会の提供につながることを期待したい。また、入館者サービス向上に不可欠な存在であり、実験植物園にも拡げ、新たに展示案内・説明など活動の場を拡げていることについて評価できる。

研究活動(資料収集及び保管を含む)

【観点例】

- ・ 自然史に関する科学その他の自然科学及びその応用(以下、「自然科学等」という。)の研究における世界の中核拠点となることを目指した活動が行われているか
- ・ 国民共有の財産である標本資料を未来の人々に継承していくための標本資料の収集及び保管は、ナショナルコレクションとしてふさわしいか

自然科学等の研究を総合的に推進し、向上発展を図るため、研究部全体で横断的研究体制を組織し研究を進める総合研究や、各研究部毎に重点テーマを設定し研究を進める重点研究などを行った。中でも「日本列島の自然史科学的総合研究」は昭和42年以来継続して行ってきた総合研究であり、平成13年度をもって具体の調査研究は終了し、14年度にまとまる予定である。この研究は、我が国全域における自然史の実態や特性に関する概要が把握できるもので、研究の成果を期待したい。また、その成果が本館の整備計画に反映されることを期待する。なお、この研究のように数年から十数年継続的に行っている研究は、今後も途絶えることなく継続されることを期待する。

経常研究については、年次研究計画に沿って重点的に研究を進める事項を検討・精査し、館長裁量経費を国際的に激しい競争下にあるジャワ原人化石の発掘調査などに重点的に投下して研究を推進するとともに、海外における標本収集やタイプ標本を含むアンモナイトの川下コレクション等貴重資料の購入などを行った。今後も重点的に進める研究を検討し、館長裁量による研究費を配分されたい。

また、共同研究等については、研究の中核拠点となりうるネットワークが形成され、自然史科学等各分野との交流連携が良くなされている。

資料収集・保管については、自然科学等におけるアジアを代表する博物館と呼ばれるにふさわしく、日本及びアジア地域の標本資料の収集に重点を置き、総合研究・重点研究において積極的な標本資料の収集に努め、調査対象地域において量・質とも十分な資料の確保ができた。また、収集した標本の中には、新種をはじめ貴重な標本を収集することができたことは評価できる。

海外の研究機関と共同で行った海外調査においても、様々な標本資料を収集した。また、海外から科博の標本資料を比較調査研究に訪れる研究者も増え、我が国を代表するコレクションとして活用されていることは評価できる。

	<p>標本資料の収集については、収集の実態をさらに分析し、今後の在り方を具体的に検討する必要がある。</p> <p>多種多様な標本資料を特性に合わせて様々な形態で新宿分館及び筑波実験植物園の収蔵庫に収蔵し、それぞれの標本に適した温度湿度管理に努め、年2回の防虫作業も実施した。また、研究官や非常勤職員が定期的に標本資料の点検を行い、液浸標本には保存液を補充するなど、手間と費用をかけて最適な保存状態の維持に努めた。引き続き良好な保管環境の維持を期待する。また、年々増加する標本資料のための収蔵スペースの確保が課題である。</p> <p>我が国を代表する貴重なタイプ標本などを対象とする標本データベースを引き続き構築し、公開中のデータベースには新たな情報を追加拡充した。電子情報化した標本資料等の累積件数は、約85万件となり、標本資料情報を公開したデータベースは34データベースに増え、インターネットを利用して世界各国の博物館、研究者などから多数のアクセスがあったことは、標本資料の質の高さを示すものである。</p>
<p>ナショナルセンター機能</p>	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 科学系博物館のネットワーク活動の中心機関として、全国の科学系博物館の活動の発展に寄与しているか 国内の科学系博物館を代表して、諸外国の博物館等との国際交流が積極的に行われているか <p>国内においては、教育・研究活動等に関連する専門的な助言、標本資料の貸出し、「数学と遊ぼう」、「すばる望遠鏡」等の巡回展、学芸員専門研修等の各種研修、国内の科学系博物館を繋ぐネットワークの構築、博物館に関連する研究集会、シンポジウム、学会等の開催にも協力し、全国の科学系博物館の中心的役割を果たした。</p> <p>国際的には、アジア太平洋地域での中核的センターとして、新たに韓国国立科学博物館と友好協定を締結、インドネシア地質研究開発センターと研究協力協定を締結した。また、国際深海掘削計画の国際共同利用センターである微古生物標本資料センターでは、資料の収集保存を行うとともに、世界各国の研究者に標本資料とデータを提供する役割を担った。また、ブータン王国からの依頼により、王立植物園の園内設計に係るマスタープラン作成に筑波実験植物園が協力したことについては高く評価できる。さらに、アジア及び環太平洋地域における自然史系博物館との研究協力を積極的に進め、研究職員を派遣するとともに、アジア各国から博物館職員及び研究者を招聘し、研究交流を行うなど活発な活動は評価できる。</p> <p>国際的な博物館関係の会議等では、国際博物館会議(International Council of Museums(略称 ICOM))の国内委員会委員長に館長が就任し、日本を代表して諸外国の博物館等と情報交換・国際交流を行った。また、アジア太平洋地域科学館協会(Asia Pacific Network of Science and Technology Centres)の副会長に館長が就任し、オーストラリアで開催された世界科学館会議に普及部長が出席し、意見交換、情報交換、協議等幅広い活動を行っている。</p> <p>以上の活動は、ナショナルセンターとしての機能を果たしていると評価できるが、今後、新しい時代のナショナルセンターとして国内外での事業展開を行っていくため、総合的・体系的に整理し、グランドデザインを確立していく必要がある。</p>
<p>業務運営</p>	<p>業務運営については概ね中期計画に基づく年度計画を達成したが、業務の効率化、組織の見直し、人事の在り方など、さらに改善可能な点があると思われる。今後、より効率的な運営を実施するためには、企画立案機能の充実を図り、経営戦略を立てる必要がある。</p>
<p>館長の主導性</p>	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 法人全体としての目標の達成、任務の遂行に向けて、法人の長としてのリーダーシップを発揮しているか <p>独立行政法人としての活動初年度に当たり、目標達成のため、館の運営に関し、職員との意見交換を踏まえ、以下のような新たな取組を実施するなど強い指導性を発揮し、館全体のアクティビティ向上のため尽力した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 独立行政法人化を契機として、科博のPRを目的に、「春休みはくウィーク」等の事業を実施し、職員の意識改革に取組んだ。 自己点検評価を実施し、館の現状を明らかにし、その結果をとりまとめ公表することによって職員の意識改革が相当なされているとともに、実施可能なものを直ちに実施したことは評価できる。 外部評価委員会を設置し、館の運営や業務について、館外の有識者から評価を受けており、改善策が出されていることを高く評価する。今後、評価結果とアドバイスを活かしてほしい。 年次研究計画に沿って重点的に研究を進める事項を検討し、館長裁量経費を重点的に投下して成果をあげた。 研究部の会議に定期的に出席、研究職員との直接対話による意思の疎通を図った。
<p>効率性</p>	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 業務運営の効率化に向けて努力しているか <p>多面的に業務の効率的運営を検討し、削減・効率化を、年度計画の各項目(光熱水量の節減、ネットワーク機器のリース契約化による事務の効率化、消耗品等の調達方法の見直し)に従って着実に実施している。各項目とも削減率が大きく、努力の跡が見られる。今後、これほどの削減が期待できるとは思えないので、計画的な削減目標を検討する必要があるのではないかと。また、評価指標においては費用の効率化に力点がおかれているが、業務の効率化についての観点も検討する必要がある。</p>

<p>収益の増加</p>	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部資金、施設使用料等自己収入の増加に努めているか <p>外部資金の受入の制度を整備し、積極的に受入を開始した。寄付金約 1,552 万円、受託研究等約 2,279 万円を獲得するなど収益の増加に努めたほか、自己収入の増加に努めた（自己収入の大半占める入場料収入は、収入目標額に比較し約 2,620 万円（12.6 %）の減、その他収入は、収入目標額に比較し約 1,230 万円（85.8 %）の増加となった。）。科学研究費補助金、科学技術振興調整費、地球環境研究総合推進費などの競争的研究資金等や各種研究奨励金を獲得するため積極的に応募し、その結果、前年度を上まわる資金を獲得することができたことは、高く評価される。</p> <p>入場料収入は、特別展等の企画内容に影響されるため、効果的な広報に努めたが、予定収入に達しなかったことに関する詳細な分析を実施し、今後の展開に役立てることが望ましい。なお、収入の不足分は、事務の効率化、光熱水量の削減及び外部資金の獲得に努めた結果、事業の推進に支障はなかった。</p>
<p>人事の適正</p>	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 計画的な人事交流の推進が図られているか 人材育成が図られているか <p>事務系の職員については、文部科学省、国立大学等と人事交流を計画的に幅広く実施し、適材適所の人員確保に努めている。また、東京近県の教育委員会から学校教員を人事交流により教育普及官として受け入れている。いずれも交流期限が原則 3 年となっているために、科博の業務に慣れて、新たな取組を始める頃に異動することになり、長期にわたるプロジェクトなどの業務を行う際に研究職員等との連携協力の課題があり、何らかの改善等の検討が必要である。</p> <p>科博で採用した事務職員には、各種の研修等（新規採用者・転任職員研修、英会話研修、教養研修）の機会を設けるとともに、館内の様々な部署で経験を積むため人事異動を行い、博物館業務の中核となる人材の育成を図った。</p> <p>研究職員は、公募によって研究経歴、研究分野等を考慮して、科博の研究部に相応しい優秀な研究者確保に努めている。</p> <p>研究者養成については、東大との連携大学院の院生、日本学術振興会特別研究員、科博独自の制度による特別研究生を指導研究官が少なく、狭隘な研究環境にもかかわらず、可能な限り受け入れて研究指導を行い、自然史科学に関係する分野の研究者養成を図った。また、茨城大学大学院農学研究所との連携大学院について、新たに協定書を締結した。自然史科学に関する研究及び教育が多くの大学から消失する傾向がある。この分野における国立科学博物館の研究者養成はますます重要となっており、このような取組は高く評価できる。</p>
<p>その他</p>	<p>前記項目以外の評価委員会による指摘事項のほか、中期計画（予算（人件費の見積もりを含む。）、収支計画及び資金計画）、（短期借入金の限度額）、（重要な財産の処分等に関する計画）、（剰余金の使途）、（その他主務省令で定める業務運営に関する事項）についても、業務運営WGにおける検討結果等を踏まえつつ、適宜記載特になし。</p>
<p>総 評</p>	<p>【観点例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 我が国唯一の国立の総合科学博物館として、自然科学等及び社会教育の振興を図る施設として先導的及び中核的役割を果たしているか <p>各項目の個別評価を総合すると、唯一の国立の総合科学博物館として、我が国の自然科学等の研究及び社会教育の振興を図る施設として役割を果たしていると評価できる。独立行政法人となった最初の年度であるが、中期目標・中期計画の達成に向けて順調に動きだしており、活気がある。ナショナルセンターとして地方の博物館等の活性化にも寄与するなどその役割を果たしており、国際的にもアジア太平洋地域の中核的センターとしての役割を果たしている。業務運営の効率化を着々と実施しつつ、限られた予算や人員の中で展示・教育サービス等の充実によく努めている。科学博物館の展示活動は、自然科学への興味や関心の喚起を通じた国民の理科や科学の理解に重要な機能を担っており、特に、新館展示場を早期に完成させるとともに、さらに国民とのコミュニケーションを図り、親しまれ愛される博物館を目指すべきである。</p> <p>研究活動は長期的な視野で捉え評価する必要があるが、13年度は計画的に実施されている。自然史科学に関する研究者の後継者養成についても、努力が認められる。</p> <p>なお、標本資料の収集については、貴重な寄贈標本を受け入れるとともに、調査研究に伴う収集活動によって、新種をはじめ貴重な標本資料の収集に成果があった。今後、調査研究により、タイプ標本等貴重な標本や質の高い標本資料の収集に努めるとともに、個人等のコレクションも積極的に受け入れ、質的な面での充実を図るなど、標本資料の収集方針を検討する必要がある。なお、標本資料の収集は、自らの努力では数的限界があることから、中期目標・中期計画における収集達成目標値について、引き続き維持するかどうか再度検討する必要がある。</p>

項目別評価<業務運営の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置>

(参考) 中期目標の各項目	中期計画の各項目	指標又は評価項目	評価基準 ¹			指標又は評価項目 に係る実績	評価	留意事項等
			A	B	C			
<p>業務運営の見直しを通じ経費の合理化を図ること。 運営費交付金を充当して行う業務については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき1%の業務の効率化を図る。</p> <p>ただし、新規に追加される業務、拡充業務分等はその対象としない。</p>	<p>1 標本資料の次世代への着実な継承及び国民へのサービスの向上を考慮しつつ、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき1%の業務の効率化を図る。</p> <p>ただし、新規に追加される業務、拡充業務分等はその対象としない。</p> <p>具体的には、光熱水量の削減、情報化、調達方法の見直し等を進める。</p>	経費の削減率(毎事業年度1%減)	1.5%以上	1.0%以上 1.5%未満	1.0%未満	<p>13年度事業経費 () 1,276,147千円</p> <p>(前年度事業経費 1,291,561千円)</p> <p>削減率 1.19%</p>	B	<p>事業経費とは、年度の総経費から人件費、新規・拡充事業費、当該年度限りの事業に要する経費を除いたものである。</p>
		経費の節減努力状況	<p>定性的に記載 評価の観点例 ・省エネ製品等の活用等、経費の節減努力は行われているか</p> <p>経費の削減については、管理部門を中心として以下のとおり削減に努力したが、水道料については削減出来なかった。</p> <p>光熱水量費の削減 電気料は、節電及び展示室内蛍光灯の省エネ型へ切り替え等を行い、前年度に比較し約750万円(6.5%)を削減した。水道料は水量調整等を行い節約に努めたが、前年度に比較し約80万円(4.5%)増加した。ガス料は、空調熱源として使用しているため、設定温度の見直し等により、前年度に比較し約180万円(11.4%)を削減した。</p> <p>電話料の削減 附属施設の内線化、外部への事務連絡の電子メール使用の励行などにより、前年度に比較し約120万円(12%)を削減した。</p> <p>調達方法の見直し等 事務用消耗品の規格の統一化及び一括調達等、電子メールによる連絡の励行、用紙の両面コピーの徹底により、約130万円(13.8%)を削減した。</p> <p>業務の効率化 情報機器を利用した業務は、最新機器を導入することで業務の効率化が図れるが、導入に当たっては、再更新を考慮し買い取りではなく、リース契約により機器の更新を行った。</p> <p>支払い事務のオンライン化 取引先銀行との支払い事務をオンライン化することによって、窓口振込に比較し、手数料が約半額となり年間約115万円の削減となった。</p>			A		
	<p>2 自己点検・評価及び第三者評価を実施し、組織の見直しを含め、</p>	組織運営の改善状況	<p>定性的に記載 評価の観点例</p>					

	<p>組織運営の改善を行う。</p>	<p>・評価等を実施し、組織運営の改善は行われているか</p> <p>自己点検・評価 12年9月に「自己点検・評価委員会」を設置した。委員会は、管理運営・教育活動・普及活動・展示活動・研究活動の専門部会を設け、点検・評価を行い、13年7月「国立科学博物館の現状と課題 - 自己点検・評価報告書 - 」にまとめた。 自己点検の結果、改善が必要な点としてとして浮かび上がった課題について、実施可能な次のもの等を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育事業では、目的・対象に応じた事業の枠組みを考慮して、次年度事業から改編、新設のプログラムを策定した。 ・ 教育ボランティア制度を改編し、博物館ボランティアとし、活動の場を拡大、充実を図った。 ・ 企画展等の実施内容を見直し、広報活動の充実を図るために、交通広告を実施した。 ・ 企画展の展示解説書（図録）を充実し、単行本（叢書）として市販できるオリジナル出版物とし、シリーズで継続して出版することとした。 ・ 筑波実験植物園では、入園者からの要望があった「今咲いてる花」紹介リーフレットを作成、入園者に無料配布を実施した。 <p>第三者評価 13年10月に「外部評価委員会」を設置し、館の現状及び今後の事業運営の在り方全般について評価及び意見をいただくとともに、自己点検・評価の結果について検証を行った。 委員会には、管理運営部会と研究部会を設置し、各部会担当分野において、中期計画の大項目に沿って評価を実施した。 さらに、13年11月から14年3月には、海外の研究者が調査研究のために来館した際に、科博の事業活動を説明し、外部の研究者（第三者）として、研究活動を中心に科博の事業について意見をいただいた。 外部評価委員会報告書及び第三者の意見を、14年度に取りまとめ、今後組織の運営に反映していく予定である。</p>	<p>A</p>
--	--------------------	--	----------

項目別評価<国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置>

(参考) 中期目標の各項目	中期計画の各項目	指標又は評価項目	評価基準 ¹			指標又は評価項目 に係る実績	評価	留意事項等
			A	B	C			
1 博物館の整備・公開 (1) 生物の多様性、生物の進化、科学技術史等のテーマ展示に重点を置いた体系的かつ自然科学と科学技術の発展過程の調和のとれた展示を展開するため、新館 期の整備、公開を進めること。	1 博物館の整備・公開 1 - 1 子どもから高齢者まで幅広い年齢層、多様なニーズを持つ人々を対象に、実物が持つ迫力、研究者等の人材資源を最大限に生かしながら、感動を与え、自然科学等に対する関心と理解を喚起するような展示展開を図る。 このため新館 期では、生命、地球環境などの課題を理解する上で不可欠な生物の多様性、生物の進化等や我が国の発展を理解する上で重要な科学技術の発達過程などについて、最新の研究成果や多面的な視野に基づくテーマ展示に重点を置いた体系的な展示を行い、新たに展示面積を 6,000㎡ 程度確保してその整備・公開を進めるとともに、その後の施設・展示の充実について検討を進める。	新館 期展示整備 状況	定性的に記載 評価の観点例 ・新館 期展示整備の取組は進んでいるか 13年10月に新館 期展示準備調査室を発足させ、新館企画調整会議のもとに設置した分野別展示企画委員会と新館期展示計画案の見直し作業を進めてきた。 展示設計業者を公募型プロポーザル方式により選定するため、官報掲載、説明書の交付、参加表明書の受付、技術提案書要請者の選定および技術提案書の受理など、展示設計業務委託に向けた諸準備を行った。 アメリカ及びヨーロッパの主要博物館の展示調査のため、職員を派遣した。 新展示館の建築工事は、15年3月竣工に向け計画通り順調に進んでいる。			A		
(2) 国民各層の科学に関する知的欲求にこたえる特別展、特別企画展の企画や常設展の展示方法・内容の改善等を通じ、入館者数の増加に努めることとし、新館 期工事の完成に伴い、通年公開がはじまる平成17年度には、 百万人以上 の入館者数を確保すること。	2 - 1 特別展等の開催、戦略的な広報、館内サービスの向上などに積極的に取り組み、入館者数の確保に努める。	入館者数の状況 ()	定性的に記載(前年度入館者数及び過去5年間の平均入館者数を併記) 評価の観点例 ・入館者数は、前年度及び過去5年間の平均実績に比してどのような状況か 全国的な博物館等への入館者数の傾向としては、減少傾向(「博物館白書(平成11年度版)」によると51.6%の館が「減少傾向」、30.0%が「変わらない」、13.5%が「増加傾向」と回答)であるにもかかわらず、13年度の総入館者数は、前年度比1.0%の増加(前年度の総入館者数889,755人)、過去5年間の平均入館者数に比して5.1%(過去5年間の平均入館者数855,619人)上まわった。 なお、総入館者数のうち、上野本館では前年度比2.1%減、過去5年間の平均入館者数と比して2.3%上まわった。筑波実験植物園の入園者数は、前年度比25.6%増加、過去5年間の平均入園者数と比して12.8%上まわった。附属自然教育			A	A	

13年度～16年度は、定量的評価基準を設けず、定性的に評価する。
17年度評価基準
A：100万人以上
B：90万人～100万人未満
C：90万人未満

			<p>園では、前年度比 18.2 %増、過去 5 年間の平均と比して 25.6 %上まわった。</p>	
<p>(3) 季節、曜日等により開館時間を延長するなど、サービスの向上を図ること。</p>	<p>3 - 1 児童・生徒に対する第2・第4土曜日の無料入館、身体障害者・高齢者の無料入館等を継続し、開館時間の延長を行うなどにより、</p>	<p>入館者数確保に向けた取組状況</p>	<p>定性的に記載（無料入館者数、延長時間における入館者数、外国語リーフレット等の作成部数及びこれらの前年度実績を併記） 評価の観点例 ・ 広報活動の取組はどのような状況か</p> <p>特別展等の広報活動 文部科学省記者会を通じて各報道機関に資料配布を行うとともに、関東地区の小中高等学校等にポスターやチラシを送付した。展覧会のテーマに応じて、関連団体や公共機関、マスコミ関係に対して積極的に戦略的な広報に取り組み、広報資料等を配布した。</p> <p>個別の取組状況は、下記のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特別企画展[情報世紀の主役たち] 情報関連団体、情報処理関係学会への資料配付を実施した。また、旅行者にゴールデンウィークキャンペーン用としてチラシ2,000部を配布した。 ・ 特別展[イタリア 科学とテクノロジーの世界] 1都3県小・中・高等学校の各学級数分、また、科学系博物館及び協賛関係企業等にチラシ40万部を配布した。 共催の日本経済新聞社を中心に社告、特集記事、関連記事を掲載するとともに、交通広告を JR、都営地下鉄・バスで実施した。 ・ 特別展[日本人はるかな旅展] 美術館、図書館及びカルチャーセンター等にポスター、チラシを配布した。共催の NHK で「NHK スペシャル - 日本人はるかな旅 - 」を放映するとともに、交通広告を JR、営団地下鉄、小田急線、京王線で実施した。 ・ 企画展[日本の博物図譜] 美術館、専門学校（デザイン・芸術系）への資料配付を実施した。 ・ 特別企画展[化石の美と科学] 画廊、専門学校（デザイン・芸術系）、大学・短大（芸術系）、への資料配付を実施した。また、第10回国際化石鉱物ショー会場でのチラシ8,000部を配布した。交通広告を都営地下鉄・バスで実施した。 ・ 企画展[ノーベル賞100周年記念展] 都内国公立大学、大学院及びノーベル賞受賞者関係大学へ資料配付を実施した。また、交通広告を JR、都営地下鉄・バス、京成線で実施した。 <p>・ 無料入館、開館時間の延長などの取組はどのような状況か</p> <p>無料入館 13年度は、次のように無料入館を実施した。 ・ 第2・第4土曜日 高校生以下対象</p>	<p>A</p>

科学博物館への入館者層を広げる。

3 - 2

レストラン、ミュージアムショップ等を充実し、入館者にとって快適な環境づくりに努める。

(4) 入館者本位の快適な鑑賞

4 - 1

- ・ 全日 身体障害者・高齢者等対象
 - ・ みどりの日 全入園者対象
 - ・ こどもの日 中学生以下対象
 - ・ 文化の日 全入園者対象（特別展中の上野本館を除く）
 - ・ 敬宮愛子内親王殿下ご生誕記念 高校生以下対象
 - ・ ノーベル賞 100周年記念展開催中 高校生以下対象
- 以上の期間の無料入館者合計は、103,890人（61.8%増）であった。（前年度 64,211人）

開館時間の延長

- ・ 特別事業「春休みかはくウィーク」開催期間中 1時間延長
 - ・ 特別展「イタリア科学とテクノロジーの世界」開催期間中 30分延長
 - ・ 特別展「日本人はるかな旅」開催期間中（9月29日～11月11日）の土日祝日 30分延長（入館者 505人）（前年度は、ダイヤモンド展開催期間中に、30分延長し、金曜日には3時間30分延長した。）
- 休館日の特別開館（園）
- ・ 14年2月12日（火・祝日の翌日）筑波実験植物園（入園者 668人）
 - ・ 14年3月25日（月）全館園（入館園者 1,448人）（前年度実施日なし）

・ 利用環境の改善はどのような取組を行ったか

レストラン

- ・ レストランのテーブルに、子ども向けの科学博物館らしいディスプレイを取り入れるなど、レストランの快適な雰囲気作り心がけた。
- ・ 新館 期建物完成後のレストラン業者の選定について、新館 期レストラン選定委員会を設置し、民間調査会社の情報も活用し、単に空腹を満たすだけでなく、楽しい雰囲気でき、レストランによって、新たな入館者層を掘り起こせるような業者を選定した。

ミュージアムショップ

- ・ ミュージアムショップは、特別展にあわせて関連商品を充実するなど、入館者に配慮した品揃えをした。
- ・ ミュージアムショップを充実させるために、外部コンサルタントと検討を進めた。

新設施設設備

- ・ 休憩室に隣接して、授乳室を設置した。
- ・ みどり館の1階に、自販機を備えた休憩コーナーを新設。
- ・ 休憩用ベンチを増設した。（筑波実験植物園）

快適な鑑賞環境の形成

<p>環境の形成のための施設整備を進めることとし、特に、身体障害者、高齢者に対してやさしい博物館としていくものとする。また、環境保全への配慮、機能性・利便性の向上に努めること。</p>	<p>段差の解消など体の不自由な入館者の利用を考慮した見学動線を確保するとともに、身障者用トイレなどバリアフリーのための施設整備を進める。</p> <p>また、点字や音声ガイドによる解説、案内の整備など、すべての入館者にやさしい博物館として、快適な鑑賞環境の形成に努める。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別展等で、身障者に配慮した展示として、触ることのできる展示などを実施した。 ・ 新館整備に関連して、既存施設についても身障者及び高齢者に配慮し、展示室通路の段差、スロープなど全館的な見直し計画を策定した。14年度から改修に着手する計画である。 ・ 母親のために授乳室を設置、休憩コーナーを新設した。 ・ 筑波実験植物園では、昼食がとれるようにテーブル付ベンチを設置した。 		
<p>(5) 我が国を代表する科学系博物館として、海外からの入館者に対しても親切的な博物館となるよう、主要外国語による展示解説、ガイドブック等の整備を進めること。</p>	<p>5 - 1</p> <p>海外からの入館者に対しても親切的な博物館となるよう、英語等主要外国語による展示解説を充実するとともに、概要、リーフレット、ガイドブック等の作成に努める。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外からの入館者に対応した外国語による展示解説等の整備はどのような状況か <p>外国語リーフレット等の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外国語リーフレット(英語、中国語、韓国語)を作成し、配布した。 <p>英語版 13年度 5,000部 (前年度 2万部) 中国語版 13年度 0部 (前年度 1万部) 韓国語版 13年度 0部 (前年度 1万部)</p> <p>外国語リーフレットは、2年間分程度を想定して作成しているが、英語版の需要が多く、追加作成した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 要覧(毎年度作成)を日本語・英語併記の新版に改定した。 ・ ガイドブックの英語版を引き続き作成した。 		
<p>2 自然科学等に関する資料の収集、保管(育成を含む。)、公衆への供覧</p> <p>(1) 科学系博物館のナショナルセンターとして、自然科学等に関する標本資料を収集、保管し、これらのコレクションの充実に努めること。資料の収集目標は、科学博物館全体として前年比5%増を目標とする。</p> <p>特に日本・アジアを中心に、自然史関係分野の標本資料の収集・充実に努めるとともに、産業技術史を含め、科学技術史を理解しうる標本資料の収集、保管を充実していくこと。</p>	<p>2 自然科学等に関する資料の収集、保管(育成を含む。)、公衆への供覧</p> <p>1 - 1</p> <p>標本資料の収集については、過去の実績、収蔵庫の状況、寄贈件数の動向を踏まえつつ、適時適切な収集を行い、前年比5%の増加を目指し、研究活動と一体的に進める。保管については、常に良好な保管環境を維持する。</p> <p>1 - 2</p> <p>自然史関係分野では、積極的に標本資料の収集・充実に努め、我が国における自然史のナショナルコレクションを体系化する。</p> <p>また、体系的な収集、保管が遅れている我が国の発展を支えてきた産業技術史を含め、科学技術史を理解しうる標本資料の収集、保管を充実する。標本資料の収集にあたっては、寄贈、寄託等、産業界等関係機関の積極的な協力が得</p>	<p>標本資料の収集数の前年度比率</p> <p>5.0%以上</p> <p>2.7% ~ 5.0%未満</p> <p>2.7%未満</p> <p>約0.7%増(前年度比)</p> <p>()</p> <p>標本資料の収集状況</p>	<p>定性的に記載(標本資料の収集数、産業界等関係機関からの寄贈標本・交換標本等の受入数及びこれらの前年度実績を併記)評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標本資料の収集及び産業界等関係機関からの寄贈標本・交換標本等の受入の状況はどうか <p>標本資料の収集・登録作業を着実に進めるとともに、標本資料数の登録方式の見直しを行った。その結果、登録された標本資料数は前年度と比較して2万2千点増加した。</p> <p>主要な研究における標本資料等の収集状況は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「日本列島の自然史科学的総合研究」で年次計画に基づき未調査地域であった関東平野及びその周辺地域において、積極的な標本収集を行い、標本約12,000点を収集した。調査研究の結果、収集標本にはタカオヒゲナガアリヅカムシ(新種)、オキナワリチラシ(新亜種)をはじめ動植物等の貴重な標本が含まれていることが分かった。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 我が国及びその沿岸域はもとよりアジア地域において 	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>8年度から11年度にかけて、大規模コレクションの整理・登録作業を集中的に行ったため標本資料数が飛躍的に増大する結果となっている。</p> <p>このことによって、整理が必要な未登録の大規模コレクションはなくなり、また、13年度は大規模な寄贈もなかった。</p>

	<p>られるよう努める。</p>		<p>も、動植物等の標本資料の積極的な収集に努め、「相模灘及びその沿岸域の動植物相の経時的比較に基づく環境変遷の解明」の研究プロジェクトでは、約 8,000 点の標本を収集し、「深海動物相の解明と海洋生態系保護に関する基礎研究」の研究プロジェクトでは、5,000 点の標本を収集した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 理工学関係では、産業界と連携して主に近代における我が国の産業技術資料の所在情報の収集に努め、「我が国で初めて製造された塩化ビニル樹脂」等 751 件の産業技術史の重要な資料情報を収集し、累計で 6,571 件となった。 <p>(標本数等)</p> <ul style="list-style-type: none"> 13 年度末現在、登録標本数 3,298,626 点 (前年度 3,276,589 点) 13 年度寄贈標本資料 26,974 点(前年度 11,714 点) 13 年度交換等による受入 1,565 点(前年度 2,003 点) <p>(国際標本番号)</p> <p>登録標本として収蔵保管される標本には、国際的に永久保管の責務を担う標準化された標本番号(動物研究部では“N S M T”,植物研究部では“T N S”を標本番号)を付して、標本台帳及びデータベースに記載している。</p> <ul style="list-style-type: none"> N S M T 登録標本 動物研究部所蔵点数 1,695,531 点 T N S 登録標本 植物研究部所蔵点数 1,201,269 点 <p>以上のように質の高い貴重な標本収集は、国内外から高く評価されているところである。</p> <p>哺乳類の骨格標本や剥製、魚類の液浸標本、植物の押し葉標本等、多種多様な標本資料をそれぞれの特性に合わせてさまざまな形態で収蔵している。収蔵庫では、それぞれの標本に適した温度湿度の管理をし、年 2 回の防虫作業も実施している。定期的に標本資料の点検を行い、液浸標本等には保存液を補充するなど、最適な保存状態の維持に努めた。</p>	
<p>(2) 保有する標本資料等については、平成 17 年度までに 150 万件 を電子情報化すること。</p>	<p>2 - 1 保有する標本資料等を未来に継承するため、電子情報化を推進する。電子情報化にあたっては、マルチメディア技術とインターネット等の情報技術を活用して、国民に提供する。</p>	<p>標本資料の電子情報化の状況 ()</p>	<p>定性的に記載(電子情報化件数(新規・累積)を併記) 評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> 標本資料の電子情報化への取組は進んでいるか。 標本資料情報等のホームページ上の公開が進んでいるか <p>我が国を代表する貴重なタイプ標本などを対象とする標本データベースを引き続き構築し、公開提供中のデータベースには新たな情報を追加拡充した。</p> <p>電子情報化した標本資料等の累積件数は、852,172 件となった。(前年度 758,454 件)</p> <p>標本資料情報のホームページでの公開したデータベースは、34 データベースである。(前年度 18 データベース)</p>	<p>B</p> <p>13 年度～16 年度は、定量的評価基準を設けず、定性的に評価する。 17 年度評価基準 A : 150 万件以上 B : 135 万件～150 万件未満 C : 135 万件未満</p>

(3) 展示については、入館者の科学理解を増進し、知的満足度を向上させるなどのため、点検・評価を行うなど改善への取組みを進め、常に魅力ある展示に努めること。

特に、特別展、特別企画展、企画展の実施にあたっては、それぞれの企画段階で意図、期待する成果、学術的な意義などを明確にし、展示方法、解説などについて科学博物館の人的資源を最大限にいかして、毎年計画的に実施するなど、より多くの人が満足するような魅力あるものを提供すること。

3 - 1
通常展示において、入館者の満足度等を調査、分析、評価し、常に改善を行うこと等により、時代に即応し、入館者のニーズに応えとともに、展示の陳腐化、マンネリ化を避け、常に魅力ある展示を維持するものとし、興味関心をもたれる展示を目指して再入館者の確保に努める。

通常展示活動の
取組状況

定性的に記載

評価の観点例

・入館者の満足度はどのような状況か

13年11月15日～12月27日に出口に回収箱を設置して常設展のアンケートを行い、474件を回収した。

調査項目としては、「おもしろかった展示」「おもしろくなかった展示」「今後充実させたい分野」等であり、結果として、40.5%(192件)の入館者が、参加体験型展示である「身近な科学」がおもしろいと回答した。また、今後充実させたい分野としては、30.0%(155件)の入館者が「動物分野」という回答があり、今後新館展示等に反映していく予定である。

アンケートで要望のあった事項のうち、すぐに対応が可能なもの(案内掲示がわかりにくいところがある等)については、要望を踏まえて改善した。

引き続き入館者の本格的な満足度調査を計画し、調査手法、対象年齢層等の検討を行い、ニーズを的確に把握して展示等に反映していく予定である。

・再入館者を確保するためにどのような取組をしているか。

13年度は、例年に比べ、特別企画展等を多く実施(特別展2回、特別企画展2回、企画展9回)し、その予告チラシの配布等広報活動に力を入れ、再入館者の確保に努めた。次回特別展の予告チラシの配布、教育普及事業などイベントの紹介ポスターを掲示し、再入館者の確保に努めた。

独立行政法人化を契機として、国立科学博物館をPRすることを目的に、特別イベントとして「春休みかはくウィーク」を13年4月1日から8日までの間実施した。

期間中実施した主な内容は、次のとおりである。

- ・ ノーベル賞受賞者白川博士一日館長の特別講演「科学と私」
- ・ セミナー「最新の科学動向と科学博物館の使命」
- ・ 科博名誉館員による講演会「かはくと歩んだ天文人生」
- ・ ギャラリートーク
- ・ オープンラボ
- ・ 工作教室
- ・ シニアガイドツアー
- ・ 記念品プレゼント
- ・ レストラン、ミュージアムショップでのサービス
- ・ 上野駅周辺での広報活動(チラシ、風船の配布)

日本弁理士会との共催で弁理士の日(7月1日)に特許制度をわかりやすく紹介し、科学するところを育むことを目的としたイベントを開催した。

主な内容は、次のとおりである。

A

3 - 2

ハンズ・オンによる体験活動等を通じて入館者が楽しみながら、学べるようエンターテイメント性に配慮するなど多様な手法を的確に用いた展示に努める。

3 - 3

特別展は毎年1回60～90日程度、特別企画展は毎年1回40～90日程度、企画展は毎年5～9回程度実施することとし、それぞれ企画段階で意図、期待する成果、学術的な意義などを明確にし、展示方法、解説などについて科学博物館の創意工夫等を凝らした、魅力的なものになるよう努める。

また、実施にあたり、入館者の満足度等を調査、分析、評価するとともに、この調査結果を展示に反映する。

なお、特別展等の開催は科学博物館をより多くの人々に知ってもらう絶好の機会でもあり、さらに、関係機関との連携・協力の場としても重要な意味をもっているため、一層充実していく。その際、関係機関、民間企業等から広報面資金面でも可能な限り協力が得ら

- ・ 科博の研究官と一般の発明家等による「知的財産権と科学の特別セミナー」
- ・ 特許と発明の相談・質問コーナー
- ・ 科学工作教室
- ・ 館内オリエンテーリング

筑波実験植物園では、植物名札や解説板を工夫して作成し、入館者に親しみやすく、分かりやすい説明に心がけた。

また、親子連れや子どもたちのために、オリエンテーリング方式の解説板（マツボックリとドングリ）を作成し、楽しみながら園内の植物に関心を持てるように配慮した。

・ 参加体験型展示等の導入に関する取組はどのような状況か

特別展の「情報世紀の主役たち」「日本人はらかな旅展」「化石の美と科学」等においても、参加体験型の展示コーナーを組み込み、入館者に興味と関心を持ってもらうことができた。

常設展示のたんけん広場「身近な科学」では、参加体験型の新展示として『大型竹とんぼ』を試作展示し、子どもたちの関心を集めた。

従来から参加体験型展示を行っている新館2階、3階のたんけん広場では、楽しみながら学べるように、多様な手法を用いて展示を維持管理するとともに、改良・試作等を実施した。

特別展の開催回数

1回以上	0回	2回 (92日)	A		
特別企画展の開催回数	1回以上	0回	A		
企画展の開催回数	9回以上	5～8回	5回未満	9回	A

特別展等の取組状況

定性的に記載

評価の観点例

- ・ 特別展等は、企画段階で意図、期待する成果、学術的な意義などを明確にして実施されたか

特別展等の実施計画に当たっては、特別企画展等企画委員会において、展示企画の意図、学術的な意義、期待される成果を検討し、展示資料の選択、展示方法の工夫、展示解説や図録・解説書の編集方針などについて、専門的な立場からの意見とあわせて、来場者にとってより魅力的な企画となるように努めた。

分かりやすく、楽しい展覧会とするために、過去に実施された特別展の実績やアンケート調査の結果から、触れる展示

れるよう積極的に働きかけるものとする。

を多く取り入れることや、可能な限り広い空間を取ることなどを反映させた。

特別展等の企画意図に賛同が得られそうな外部団体に協力・援助を積極的に依頼した結果、資金面だけでなく広報活動にも協力を得られたものもあった。協力団体と科博の双方について、社会的認知度が高まったという成果があった。

各特別展等の具体的な実施内容は次のとおりである。

【特別展 2回】

特別展「イタリア 科学とテクノロジーの世界」

(13年7月14日～9月2日 44日間開催)

日本におけるイタリア2001年財団、日本経済新聞社と共催で、ルネサンス期における近代科学の芽生えから現代のテクノロジー社会まで、イタリア科学の歴史の中で貴重な発明品や実験装置、アート作品などを展示し、科学・技術の分野のみならずデザインの分野でも優れたイタリアを明らかにした。

天才ダ・ビンチが生まれた国らしく、科学技術分野の機械、器具だけでなく、工芸品、美術品絵画等まで、イタリアの科学史、技術史から芸術まで幅広い分野の一級品が展示された。

造型やデザイン関係の見学者が熱心に見学していたことから、科博の新たな入館者層になる可能性が見つかった。

(総入場者数 64,345人)

特別展「日本人はるかな旅展」

(13年9月18日(火)～11月11日(日)48日間開催)

NHKと共催で日本人のルーツを探るという展覧会として、化石人骨、石器、土器などを展示したほか、原人の足跡との歩幅の体験コーナー、頭骨化石にさわられるコーナーやマスコミの注目を集めて話題となった石器捏造コーナーを設けたり、大型プラズマディスプレイによる迫力ある映像を放映する試みを行い、日本列島に到達した新人(ホモ・サビエンス)が、絶えず交流・融合を繰り返しながら、厳しい自然環境の変化を克服し、成熟した技術・文化を築き上げていく過程を描き出した。

この展覧会は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本人及び日本文化の起源に関する学術的研究」チームが手がけた近年の日本列島をはじめとする東アジアでの新たな発見や発掘の成果に基づいたものである。

この展示企画進行中に、日本の考古学会を揺るがす「捏造石器・遺跡」事件が報道された。早速特別展の中にこの件を科学的に扱う展示を組み込み、タイムリーな展示となった。

(総入場者数 71,699人)

【特別企画展 2回】

特別企画展「情報世紀の主役たち」

(13年3月6日～6月3日 78日間)

21世紀のはじめにあたり、単に技術としてではなく、社会の歴史として情報技術発展の様子を振り返り、歴史的資料と演示装置を通じてその基礎原理を理解し、先人の努力を知ろうとしたものであり、この展示を通じて、科学技術の難しさや近寄りやすい雰囲気や緩和し、我々の生活に与えた影響やその行く末を考える場を提供した。

なお、この展覧会は、参加体験型の展示を取り入れ、コンピュータの原理を分かりやすく説明するとともに、コンピュータの開発史上、貴重な実物資料が見られる展覧会となった。
(総入場者数 46,461人)

特別企画展「化石の美と科学」

(13年12月4日～14年2月17日 60日間)

20世紀後半に飛躍的に進歩した古生物学研究成果の一部として、芸術と科学の融合ともいえる生痕化石と我が国最大の北海道白亜紀アンモナイトの川下コレクション等を紹介し、来館者が古生物学に親しみをもち、生物進化の謎を考える機会を提供した。

なお、この展覧会では、標本に直接手で触れながら見学できる展示を展開するとともに、民間との共同研究により開発したアンモナイトが生きていたときの姿と化石を比較して展示するこれまでにない化石展示の手法を取り入れた。

また、この特別企画展の解説図録(科博叢書)は、内容の良さと図版の美しさから購入希望が多く、初版3,000部を完売した。
(総入場者数 46,747人)

【企画展 9回】

企画展「2001夏休みサイエンススクエア」

(13年8月14日～8月26日 12日間)

子どもたちが展示や実験・観察ならびに製作などによって、自ら見たり、試したり、確かめたりして科学の世界に触れ、楽しみながら学習することを通じて、科学への関心を高め理解を深めることを目的として実施した。

例年の企画ではありながら、職員のアイデアと熱意で年々少しずつ改良が加えられて、毎年この企画を楽しみに来館する常連の親子も少なくない。夏休みの工作や自由研究のヒントにしようという熱心に見学する親と、工作に夢中になっている子どもたちの様子が、展示企画・工作指導する担当者の励みとなる企画であった。

企画展「日本の博物図譜」

(13年10月6日～11月11日 31日間)

科博がかねてより進めてきた江戸・明治期の動物画の修復が前年度に終了したことを機に、これらの博物画とともに当館に収蔵されている他の博物画を一般に公開することにより、自然史研究に欠かせない動植物の精密な博物画を展示し、自然史研究に対する一般の関心を高めることを目的として実施

した。

この企画展の解説図録（科博叢書）は、展示資料の分かりやすい解説と貴重な図版が評判になり、初版 3,000 部は完売した。なお、この図録は「第 36 回造本装幀コンクール」（主催：社団法人日本書籍出版協会、社団法人日本印刷産業連合会）において、そのデザインの良さが認められ自然科学部門で、日本出版協会理事長賞を受賞した。

企画展「ノーベル賞 100 周年記念展」

（14 年 3 月 19 日～6 月 9 日 75 日間）

ノーベル財団がノーベル賞創設 100 周年を記念して開設したノーベル博物館の展示と同規模のものを世界巡回展用に構成したものであり、授与国であるスウェーデン及びノルウェー以外では世界で初めて開催したものである。

巡回展に加え科博独自の企画として、「日本人受賞者コーナー」を設け、各受賞者の功績と創造性を紹介し、ノーベル賞を身近に感じ「創造性の文化」を考えるためのきっかけとなるよう展示を行った。

2 年続けて日本の科学者がノーベル賞を受賞したことから、ノーベル賞が身近に感じられた年の開催となった。取材も多く、教育関係者からの資料請求や問い合わせも数多くあった。

期間中は高校生以下を入場無料にしたために、中学生の修学旅行グループが多数入場していた。「日本人受賞者コーナー」に関心が高かったことも今後の展示企画の参考になった。

企画展「第 17 回植物画コンクール入選作品展」

（13 年 4 月 10 日～4 月 15 日 6 日間 つくば美術館）

（13 年 4 月 28 日～5 月 27 日 26 日間 上野本館）

企画展「第 18 回植物画コンクール入選作品展」

（14 年 3 月 5 日～3 月 17 日 12 日間 筑波実験植物園）

筑波実験植物園において、自然の理解を図る教育普及活動事業の一つとして、毎年、植物画コンクールを行ってきている。このコンクールは、植物画を描くことによって、植物のすがたを正しく観察し、植物のもつ特性をより理解するとともに、植物に対する興味を持ち、併せて自然保護への関心を高めることを目的としたものであり、コンクールの入選作品を展示したものである。

企画展「スマレ展」

（13 年 4 月 17 日～4 月 22 日 6 日間）

なじみの深いスマレをはじめ、国内の他の施設では見ることのできない希少種など、約 160 点を展示し、スマレの種類に理解を深めるとともに、これらの植物をとりまく自然の素晴らしさについて、理解を深めることを目的として実施した。

企画展「クレマチス展」

(13年5月8日～6月3日 24日間)

筑波実験植物園では、クレマチスの原種を含め約200種類、1,100株を地植えで維持管理しており、本展は、クレマチスの仲間の華麗な花や、自然と人間が作り出した素晴らしい色や形を観賞・観察することを目的として実施した。また、これらに関する研究成果を、植物園セミナー「クレマチス属の自然史」「クレマチス属の園芸文化史」として公開した。

企画展「ラン展」

(14年2月10日～2月17日 7日間)

国内でも独特かつ有数のコレクションを誇る筑波実験植物園の熱帯産野生種に加え茨城県内のラン愛好団体などの出品による園芸品種など、国内の他の施設では見ることの出来ない希少種を展示し、ランに対する関心を集め、併せて植物学的知識と野生生物に関する自然保護意識の普及を目的として実施した。

企画展「鳴く虫」

(13年9月2日～9月9日 7日間)

自然教育園内に生息する鳴く虫、10数種を展示し生態を紹介することにより、身近な自然の理解を深めることを目的として実施した。

企画展「森のクラフト」

(13年10月21日～12月24日 56日間)

木・竹・木の実などの素材を使ったクラフト作品を展示し、材料の形のおもしろさ、自然のあたたかさに触れることを目的に実施した。

- ・特別展等の展示方法、解説は、創意工夫を凝らした魅力的なものになるような取組となっているか

各特別展、企画展等の展示、解説の実施には、見学者に魅力的な展示となるように次のような取組を行った。

特別企画展「情報世紀の主役たち」

- ・研究官が展示会場において展示品を実際に操作させながら解説を行うギャラリートークを実施した。
- ・稼動可能な展示品について教育ボランティアが簡単な構造の説明を加えながら実演をした。
- ・コンピュータの仕組み等について、参加体験型展示を実施した。
- ・情報技術の基礎原理をイラストを入れわかりやすく解説した、小・中学生用資料を作成した。

特別展「イタリア 科学とテクノロジーの世界」

- ・展示資料を見ただけでは、どのようなことに使われるものか分かりづらい機器類の展示について、教育ボランティ

アによるポイント解説を行った。

特別展「日本人はるかな旅展」

- ・ 大型プラズマディスプレイ映像を利用した。
- ・ 参加体験型展示として、原人の足跡の歩幅体験コーナー、レプリカの丸太舟に触れることができるコーナーを設けた。
- ・ 縄文人と弥生人を比較したお面作りの体験コーナー、石器の切れ味の体験コーナーを設けた。

特別企画展「化石の美と科学」

- ・ 参加体験型展示として、恐竜の足跡やアンモナイトの化石など実物標本に触れる展示を実施した。
- ・ アンモナイトが生きていた時の姿がイメージできるように、同じ頭足類のオウムガイを水槽で飼育展示した。
- ・ 展示業者との共同研究により、アンモナイト化石に触れると生存時の姿を示す展示手法を開発し、実施した。
- ・ アンモナイト、三葉虫等のレプリカづくりを体験させた。
- ・ コンピュータの化石クイズコーナーを設置した。

企画展「ノーベル賞 100 周年記念展」

- ・ 「ノーベル博物館」の Web site 閲覧コーナーを設置した。
- ・ ノーベル賞受賞者の声を聞くことができるコーナーを設置した。
- ・ ノーベル賞受賞者野依教授の研究課題である鏡像体構造を持つ物質の臭いの違いを体験できるコーナーを設置した。
- ・ 小・中学生用に、展覧会の意義、企画の意図等をイラストを入れわかりやすく解説した資料を作成した。
- ・ 期間中、ノーベル博物館館長を講師に特別講演会を開催した。次年度には、ノーベル賞受賞者の白川博士、野依博士を講師とする特別講演会を実施する予定である。
- ・ 春休み期間中を中心に、毎日、科学史を専攻する大学院生による 1 日 2 回のガイドツアーを実施した。

・ 入館者の満足度はどのような状況か

「情報世紀の主役たち」、「かはくウィーク」、「イタリア科学とテクノロジーの世界」、「日本人はるかな旅展」、「日本の博物図譜」、「化石の美と科学」の各展覧会ごとにアンケート調査を実施した。

アンケート調査の結果、各展覧会については「全体的に興味深かった」と「部分的に興味深かった」を合わせると全回答のうち、80%となった。

筑波実験植物園では、企画展入園者に対するアンケートを実施した。

結果としては、約 70%の入園者が、「非常に良かった」あるいは「よかった」と回答した。

3 - 4

科学博物館が有する人的資源を最大限に活かし、入館者の自然科学等に対する興味関心を触発するような体制を整備する。

アンケートの要望事項から、園内に 13 台休憩用ベンチを増設した。

「化石の美と科学」においては、アンケート調査に加え、モニター調査、行動観察調査を実施し、展示開発における利用実態などにより、展示の操作性、メッセージの伝達度、満足度などを調査し、通常のアンケート調査では得られない情報が得られた。

- ・ 特別展等毎に関係機関との連携・協力が図られるような取組をしたか

特別展等の企画・実施に当って、共催、協力、協賛、後援などの手続きにより、展示資料の借用、広報援助、資金面の援助等を得ることができた。

各特別展において次のような取組をした。

- ・ 特別企画展「情報世紀の主役たち」
日本情報処理学会等との連携を図り、展示企画や展示資料、広報活動に協力を得て特別企画展を実施した。
- ・ 特別展「イタリア 科学とテクノロジーの世界」
日本におけるイタリア 2001 年財団、イタリア政府、日本経済新聞社等との連携・協力を図り、特別展を実施した。
- ・ 特別展「日本人はるかな旅展」
NHK、NHK プロモーションと共催とし、日本人類学会、日本考古学協会等の連携・協力を図り実施した。
- ・ 特別企画展「化石の美と科学」
ドイツ・チュービンゲン大学地質学研究所、三笠市立博物館、日本古生物学会等との協力を得て、特別企画展を実施した。
- ・ 企画展「ノーベル賞 100 周年記念展」
文部科学省、日本学術振興会と科博が主催し、ノーベル財団、スウェーデン政府が共催、メリルリンチ日本証券、住友製薬が協賛という連携・協力体制のもとに、企画展を実施した。

- ・ 利用者の興味関心を触発するような体制づくりが行われているか

展示資料や情報だけでなく、人的資源を有効に使う、入館者に自然科学に対する興味関心を触発するような体制づくりを整備するために次のような取組をした。

- ・ 研究官が展示会場において展示資料を実際に操作しながら解説を行うギャラリートークを実施した。
- ・ サイエンススクエアの行事では、研究者が実験、観察、工作を直接指導した。
- ・ 大学院生が、展示を解説しながらガイドツアーを実施した。

			<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育ボランティアが、実演可能な展示資料について、簡単な説明を加えながら実演をした。 	
<p>3 自然科学等の研究の推進 (1) 総合科学博物館として自然科学等における世界の中核拠点になることを目指し、研究課題に応じた柔軟な研究体制等により、研究を計画的に実施すること。その際、研究成果が展示等を通じて国民の関心、理解の増進に反映されるという科学博物館の研究の特色を十分に発揮すること。</p> <p>自然史科学研究については、主として日本、アジアを中心に自然物を記載し分類して、それらの相互の関係や系統関係を調べ、過去から現在に至る地球の変遷、人類を含む生物の進化の過程と生物の多様性の解明を進めること。</p> <p>また、自然科学の応用については、主として人類の知的活動の所産として社会生活に影響を与えた産業技術史を含む科学技術史資料など、保存すべき貴重な知的財産の収集と研究を行うこと。</p> <p>具体的には、動物研究分野は、あらゆる動物群を対象として、種分類学、系統分類学、動物地理学、形態学等の研究を行い、種の多様性及び類縁関係の解明を進める。</p> <p>植物研究分野は、植物に関する系統分類学と種分化等その応用分野（自然保護を含む。）に関する研究を行い、種の多様性及び類縁関係の解明を進める。</p> <p>地学研究分野は、岩石の成因と地質体の形成過程や鉱物の生成条件の解明を進める。また、古生物の系統進化、比較形態、古生物地理、古生態の解明を進める。</p> <p>人類研究分野は、人類の形態</p>	<p>3 自然科学等の研究の推進 1 - 1 自然史に関する科学その他の自然科学及びその応用の研究における世界の中核拠点となることを目指して、これに相応しい研究テーマを設定する。また必要に応じ、大学や他の研究機関と連携を図る。</p> <p>このため、適時的確に研究評価を行い、重点的に推進すべきものについては、人材、資金を含む研究資源の重点配分を行うよう努める。</p> <p>1 - 2 研究については、科学博物館としての研究の継続性にも留意しつつ、1) 科学博物館が研究部全体で横断的研究体制を組織し、研究を進める総合研究を「日本列島の自然史科学的総合研究」など3テーマ程度、2) 各研究部毎に重点テーマを設定し研究を進める重点研究を「深海動物相の解明と海洋生態系保護に関する基礎研究」など7テーマ程度、3) 経常研究に分けて研究を進める。</p> <p>1 - 3 総合研究及び重点研究については、重点的に進める研究領域を定めて研究資源を投下する。</p>	<p>調査研究の実施状況</p>	<p>定性的に記載 評価の観点例 ・ 研究資源の重点配分の取組はどのような状況か</p> <p>各研究部の会議及び全研究部員による研究部連絡会議等で、総合研究及び重点研究として取り上げるべき研究テーマについて、科博が自然科学等の研究における世界の中核拠点となることを目指すに、ふさわしいものであるか検討し、研究計画を設定した。これらの研究は複数年次にわたるものであり、調査地域および研究分野、分担等を検討して年次研究計画を策定し、標本資料の収集やそれに基づく調査研究を計画的に実施した。</p> <p>研究計画によっては、大学や他の研究機関と連携を図り、共同研究、研究協力などが必要なものには、その体制整備を図った。</p> <p>13年度に実施した総合研究及び重点研究は、中期計画中の計画のうち、総合研究2件、重点研究3件であり、それらの研究については、重点的に進める研究領域を設定し、研究資源の重点配分を行った。</p> <p>重点配分を行った研究領域は次のとおりである。</p> <p>【総合研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「日本列島の自然史科学的総合研究」 関東平野及び後背山地を中心とする地域の山地、海域を重点的に調査の対象とし、標本収集・研究等のための研究費を重点配分した。 ・ 「相模灘およびその沿岸域の動植物相の経時的比較に基づく環境変遷の解明」 相模湾と三浦半島周辺地域を重点的に調査の対象とし、標本収集・研究等のための研究費を重点配分した。 <p>【重点研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「深海性動物相の解明と海洋生態系保護に関する基礎研究」 琉球海溝東部斜面を重点的に調査の対象とし、標本収集、標本の汚染状況の調査等のための研究費を重点配分した。 ・ 「ストランディング調査に基づく海棲哺乳類の形態学、生物学等基礎的研究及び環境汚染物質蓄積の長期モニタリングとその影響評価等に関する病理学的研究」 ストランディングによって死亡した個体の形態学的、生物学的、病理学的及び環境科学的な調査研究を重点的に行うための研究費を重点配分した。 	<p>B</p>

<p>に関する進化学的研究を行い、人類の進化や分布の過程及び日本人の形成について解明を進める。</p>			<p>・「産業技術史資料の評価・保存・公開等に関する調査研究」VTR、コンピュータ等の技術発達の系統化、産業技術史資料の「登録」制度の有効性についての実証実験等を行うための研究費を重点配分した。</p>	
<p>1 - 4 総合研究は、次のように実施する。 「日本列島の自然史科学的総合研究」は、平成13年度、14年度において関東平野を中心とする地域の調査を実施する。この研究成果は、日本列島の自然を理解する基礎資料として自然史研究はもとより、環境保全や生物多様性の保存などに関する諸活動に供する。 「西太平洋における島弧の自然史科学的総合研究」は、平成14年度から開始し、日本列島の自然史に関する総合研究の成果を基に、平成17年度までにモンスーン地帯における島弧の自然史のなかで、特に日本列島を特徴づける南方系生物相の起源の総合的な解明を進める。 「相模灘及びその沿岸域の動植物相の経時的比較に基づく環境変遷の解明」は、平成13年度から開始する。120年前の生物学黎明期に來日した外国人研究者による研究及び昭和天皇の約60年前の採集調査研究で明らかにされた生物相と今回の調査研究を比較し、相模灘の環境変遷の解明を進める。</p>	<p>総合研究の実施状況</p>	<p>定性的に記載 評価の観点例 ・大学等の研究機関との連携が図られているか ・研究計画に沿って実行されているか 「日本列島の自然史科学的総合研究」 13年度は科博研究者20名と大学等外部研究機関から7名の研究者が協力して、関東平野および周辺の山地、海域において野外調査を行った。各研究者は専門に応じて調査地域と時期を設定し、調査期間は平均10日ほどであった。得られた標本は現在研究が進めている。 また、13年末には、前年度の調査研究の報告書を出版した。この総合研究は昭和42年度から35年間に亘って計画的に進めてきたもので、14年度に調査研究の総括をし、成果を発表する計画である。 「相模灘及びその沿岸域の動植物相の経時的比較に基づく環境変遷の解明」 科博研究者23名、大学等の研究機関研究者33名を陸上動物班、植物班、海生生物班の3班に分けて相模湾とその沿岸域のうち三浦半島周辺海域並びに伊豆半島沿岸地域を中心に動植物相調査を行い、標本を収集した。 菌類、魚類、エビ類において未記載種が見い出され、また、昆虫類や海産無脊椎動物において未記載種、未記録種が含まれていることが示唆されている。さらに、すでに消失したと思われていた生物の生育を確認できるなど経時的な比較に基づく研究もあった。特に、絶滅危惧種の植物ソナレセンブリが伊豆半島で発見されたほか、ナメクジウオ、タコクラゲ、シャミセンガイの生息確認など経時的な比較に基づく研究の成果もあった。この研究成果の公表の準備を進めている。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>1 - 5 重点研究は、次のように実施する。 「深海動物相の解明と海洋生態系保護に関する基礎研究」は、平成16年度までに、南西諸島における深海性動物相を包括的に解明を進めるとともに、かつ有害物質による汚染状況を調査し、日本近海での深海動物に関する生物地理や汚染物質の生物蓄積現況の解</p>	<p>重点研究の実施状況</p>	<p>定性的に記載 評価の観点例 ・大学等の研究機関との連携が図られているか ・研究計画に沿って実行されているか 「深海動物相の解明と海洋生態系保護に関する基礎研究」 種子島及び奄美大島近海にて底引き網による採集を行った。また東シナ海の大陸棚において底引き網及びソリネットや稚魚ネットによる採集を行った。多くの魚類のほか、甲殻類や海綿類、小型底生無脊椎動物の標本を得た。現在、科博の研究職員と大学等研究機関の研究者が分類学的に精査中である</p>	<p>A</p>	<p>A</p>

明を進める。

「ストランディング調査に基づく海棲哺乳類の形態学、生物学等基礎的研究及び環境汚染物質蓄積の長期モニタリングとその影響評価等に関する病理学的研究」は、ストランディング（漂着、座礁）した海棲哺乳類を年間20～30件現地調査することにより、その系統進化と生態を解明し、長期モニタリングによるストランディングの原因の解明を進めるとともに、得られた標本資料は、環境汚染の影響評価などの基礎資料に供する。

「種多様性遺産の植物分類学的研究 - 隠花植物を中心として - 」は、高い種多様性を維持していると考えられる地域の隠花植物を中心に分類学的に精査し、種多様性遺産としての科学的意味と価値の解明を進める。

「地球環境変動に伴う脊椎動物の適応放散及び形態進化の研究 - 中生代以降の四肢動物を例として - 」は、新生代における地球規模の環境変遷史のうち、後期始新世に始まる周南極海流の成立と氷期・間氷期の変動に絞り、海洋プランクトン群集の高精度変遷史を明らかにすることによって、化石群集に記録された古気候・古海洋環境の変遷史の解明を進めるとともに、海洋動物相、陸上古生物相から、海洋と大陸相互の環境変動史特性の解明を進める。

「日本人の起源に関する人類学的研究」は、化石人骨や古人骨の形質人類学的研究を中心に、DNAの研究や考古学の分野からの協力を得て、日本人の由来および形成の歴史の解明を進める。

「産業技術史資料の評価・保存・公開等に関する調査研究」は、我が国の産業の発展を支えた先人の足跡を明らかにする資料を調査研究し、産業技術史資料の所在情

が、冷凍保存した一部の標本については汚染物質の分析も行っている。

この研究は広く太平洋の生物相を解明し、海洋資源を保護・活用するためにはなくてはならないデータとして有意義なことから、環太平洋の国々からも注目されている。

「ストランディング調査に基づく海棲哺乳類の形態学、生物学等基礎的研究及び環境汚染物質蓄積の長期モニタリングとその影響評価等に関する病理学的研究」

16都道府県31市町村においてストランディングしたクジラ類130個体の調査、標本採取を行った。骨格標本をはじめ、生物学的データ、汚染物質分析用サンプルなどを採取し調査研究を進めた。また、鳥取大学等の研究者らとストランディング研究のためのネットワーク構築について協議した。

13年度中に鹿児島県と茨城県で起こった大規模ストランディングを契機に、ストランディング発生時の対応体制整備を検討した。

クジラ類のストランディングについては、マスコミで大きく取り扱われたことから、この研究プロジェクトが各種のメディアで紹介された。一般の人にも科博の研究活動が理解され、関心を寄せる人からの問い合わせも増え、科博の認知度を高めたとと言える。

「産業技術史資料の評価・保存・公開等に関する調査研究」資料登録、系統化等の方法をほぼ確立した。系統化はVTR、コンピュータ、塩化ビニールの3分野に関して行い、報告書を刊行した。併せて、VTR技術発達の資料集を刊行した。

NHKテレビ番組「プロジェクトX」で、ビデオシステム開発の苦労話を取り上げられ、科博の研究者が当時の開発資料などを調査研究した成果が生かされ、番組の企画を通して、博物館の調査研究活動が改めて評価された。

このような具体的なテーマが他にもあることから、調査研究の成果の新しい発表の方法となる可能性もあり、産業界やマスコミ等からの注目を浴びることが予想される。

	<p>報を収集するとともに、その集大成・体系化を図る。</p> <p>「植物の紫外線防御等の環境制限因子と種の多様性の保全に関する総合研究」は、植物が進化の過程で獲得した紫外線の防御及び環境制限因子等の機構について、植物の生態との関連から総合的に解明を進め、種の多様性の保全を図る。</p>				
	1 - 6	館長裁量経費による研究状況	< 全体評価における「館長の主導性」として評価 >		
	研究者の能力を最大限発揮するため、館長裁量による研究費を配分し、研究を推進する。		動物研究部 5 件、植物研究部 5 件、地学研究部 4 件、人類研究部 1 件、理工学研究部 3 件、筑波研究資料センター 4 件、附属自然教育園 2 件、合計 24 件の研究テーマについて、館長裁量経費によって重点的に研究費を配分し、調査研究を推進した。		
(2) 研究の実施にあたっては、各種競争的研究資金制度の積極的活用、適時的確な研究評価の実施等、研究環境の活性化を図ること。また、共同研究及び研究者交流の増を図るとともに、研究成果の普及、活用は多様な手法を用いてその増進を図ること。	2 - 1	科学研究費補助金等の活用状況	定性的に記載 (科学研究費補助金等各種競争的研究資金の実績を併記)	A	
	科学研究費補助金等、各種研究資金制度を積極的に活用し、採択率の向上に努める。		評価の観点例 ・科学研究費補助金等各種競争的研究資金の確保については、どのような状況か		
			科学研究費補助金による各種研究プロジェクトが 27 件(約 1 億円)採択された。(前年度 26 件) 新規採択率は 26.3 % であり、全国平均 20.7 % を大きく上回った。(前年度 18 %) 特に、大型規模の研究である特定領域研究(A)「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」が新規に採択された。 また、科学技術振興調整費や地球環境研究総合推進費などの競争的研究資金等 5 件約 2,000 万円を獲得した。		
	2 - 2	共同研究等の状況	定性的に記載 (外国との研究交流を含めた共同研究、受託研究等の実施件数及びこれらの前年度実績を併記)	A	
	大学、産業界との共同研究、研究者の交流を行うなど、外部機関との連携強化を図る。		評価の観点例 ・共同研究及び受託研究等、外部機関との状況はどうか		
			独立行政法人化にあわせて、各種外部資金の導入のための制度を整備し、民間等からの研究資金の受入をともなう共同研究や受託研究等の実施を始めた。 13 年度の実施状況は、共同研究 3 件、受託研究 6 件、受託研究員 3 件であった。		
	2 - 3		・学会、外国人研究者との共同研究や研究交流の状況はどうか		
	外国の博物館や外国人研究者との国際共同研究など、国際交流を含む研究交流を推進するための所要の体制を整備する。		科博が中心となって、国内外の博物館・大学等の機関及び研究者と協力して、13 年度 8 件の国際的な共同研究を実施し		

			<p>た。主なものとして、「アバトサウルス」に関するケンブリッジ大学との共同研究、「江戸のものづくり」をテーマとした国内外の歴史学・科学技術史の研究者との共同研究、「産業技術の歴史」に関する産業界 20 団体及び海外の研究者との共同調査などを行った。</p> <p>科博研究者が、学術団体・学会の役員や委員として活動した他、各種の自然史関連学会等と共催・協力し、科博を会場として「日本分類学連合設立総会」、「日本昆虫分類学会第 4 回大会」などを行い、国内外の研究者の研究交流を図った。</p> <p>「アジア及び環太平洋地域における自然史系博物館との研究協力」は、9 年度から積極的に進めており、13 年度は中国、韓国、台湾に 6 人の研究者を派遣し、調査研究を行った。また、派遣した 3 カ国から研究者を招聘し、共同研究を行うとともに、自然史研究の現状や自然史標本資料の管理・保管・利用に関するワークショップなど研究交流を実施した。</p> <p>ジャワ原人の頭骸骨研究の国際共同研究プロジェクトを実施するために、インドネシア政府機関である地質研究開発センターと研究協力協定を締結し、インドネシアの人類学及び考古学研究者と共同調査研究等を進める体制を整備した。</p>		
4 教育及び普及	<p>2 - 4</p> <p>研究成果については、研究報告等を充実し、当該研究分野の発展に資する。さらに、研究集会、ホームページなどを通じ、積極的に普及を図る。</p> <p>また、研究成果をデータベース化・公表することにより、本分野における研究の効率的な推進等に貢献する。</p>	研究成果の公表，普及の取組状況	<p>定性的に記載（研究者一人当たりの平均論文数，研究報告等の刊行数，研究集会の実施数及びこれらの前年度実績を併記）</p> <p>評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究者一人当たりの平均論文数の状況はどうか。（ ） ・研究報告等の刊行の取組はどのような状況か ・研究集会の実施状況は，前年度に比してどのような状況か <p>研究成果の公表，普及を行うために，各種学術雑誌等に投稿発表し，学術図書あるいは一般啓蒙書として出版した。</p> <p>『国立科学博物館研究報告』等の科博が編集発行する刊行物でも公表，普及が行われた。また，研究集会における公表，普及や研究成果をデータベース化することによるインターネットでの公表，普及を行っている。</p> <p>13 年度一人当たりの平均論文数 2.9 点（前年度 3.0 点）</p> <p>13 年度に科博が刊行した報告書等 18 点は，次のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究報告 5 シリーズ 14 種（前年度同） ・ 筑波実験植物園研究報告第 20 号（前年度同） ・ 自然教育園報告第 33 号（前年度同） ・ 専報第 37 号（前年度 4 点） ・ モノグラフ第 22 号（前年度 3 点） <p>研究集会・シンポジウムは，セミナー「最新の科学動向と科学博物館の使命」をはじめ，21 回（前年度 17 回）実施</p>	B	国立科学博物館が発行する研究報告等に掲載した論文を含む。
	4 教育及び普及	学習機会提供事業	定性的に記載		

<p>(1) 子どもから高齢者まで幅広い層に自然科学等に関する学習機会を提供する事業を実施すること。実施にあたっては、科学博物館の人的資源、資料、施設等を最大限に生かし、国民のニーズを反映しつつ、生涯学習推進のモデル機関に相応しい事業を展開することにより、平成17年度には総参加者数4万5千人を達成すること。</p>	<p>1 - 1 子どもから高齢者まで幅広い層に自然科学等に対する学習機会を提供する事業の充実を図る。自然の理解を深めるものとして「自然観察会」など、科学技術についての理解を深めるものとして「楽しい化学の実験室」など、また自然科学の総合的理解を深めるものとして「かはく・たんけん教室」などの事業を実施する。実施にあたっては、科学博物館の人的資源、資料、施設等を最大限に生かし、内容の充実を図る。</p>	<p>の実施状況</p>	<p>評価の観点例 ・教育プログラムのテーマが、子どもから高齢者まで幅広い層に学習機会を提供するものになっているか</p> <p>小学生が気軽に学べる「かはくたんけん教室」、小・中学生が継続的に学習する「かはくたんけんクラブ」、一般の方が専門的なことを学ぶ「自然史セミナー」や「科学史学校」など幅広い層に自然科学等に対する学習機会を提供するとともに、研究官、教育部の教育普及官、教育ボランティア、外部の講師等を活用し、上野本館を始め新宿分館、筑波実験植物園、附属自然教育園、又は館外のフィールドを利用し効果的な教育活動を実施した。</p> <p>13年度は、次の活動を延べ766日実施した。</p> <p>自然の理解を深めるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小・中学生対象「子どもの自然教室」 ・小学生以上対象「自然観察会」 ・高校生以上一般対象「自然史セミナー」 <p>など18種類、延べ372日実施</p> <p>科学技術についての理解を深めるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小・中学生対象「楽しい化学の実験室」 ・小学生以上対象「親と子の都市と建築講座」 ・高校生以上一般対象「科学史学校」 <p>など9種類、延べ55日実施</p> <p>自然科学の総合的理解を深めるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学生以上一般入館者を対象「かはくたんけん教室」 ・小・中学生とその保護者を対象「親子ふれあい実習教室」 <p>など4種類、延べ339日実施</p>	<p>A A</p>	<p>13年度～16年度は、定量的評価基準を設けず、定性的に評価する。 17年度評価基準 A：45,000人以上 B：40,500人～45,000人未満 C：40,500人未満</p>
	<p>参加者数の状況 ()</p>		<p>定性的に記載（参加者数及び前年度実績を併記） 評価の観点例 ・参加者数は、前年度に比してどのような状況か。</p> <p>13年度の教育活動参加者は、前年度比23%の増と大幅な伸びを示した。 13年度延べ参加者数49,056人 (前年度39,806人)</p>	<p>A</p>	
	<p>1 - 2 自然科学等に関する青少年の種々の活動を対象としたコンクール・発表会の実施など、自然科学等に関する啓発活動を充実する。 コンクールとしては「植物画コンクール」を毎年1回実施する。また、青少年に対する自然科学等に関する啓発活動として「少年科学クラブ発表会」を毎年実施する。</p>	<p>青少年を対象とした啓発活動の状況</p>	<p>定性的に記載 評価の観点例 ・植物画コンクールはどのように実施されたか ・少年科学クラブの活動はどのように実施されたか</p> <p>第18回植物画コンクール 植物画を描くことによって、植物のすがたを正しく観察し、植物の持つ特性をより深く理解するとともに、植物に対して興味を持ち、あわせて自然保護への関心を高めることを目的として、植物画コンクールを実施し、文部科学大臣賞をはじめ109点の入賞作品を選考した。</p>	<p>B</p>	

			<p>応募点数は、小学生の部3,824点、中・高校生の部1,965点一般の部291点で、合計6,080点であった。</p> <p>入選作品の展示会を、3月5日～17日に筑波実験植物園で実施した。</p> <p>かはくたんけんクラブ</p> <p>自然科学に継続的に関わり合いを持たせながら、実験、観察、現地見学、講義、討議、展示製作、プレゼンテーション等の多様な学習手法を効果的に組み合わせ、青少年の科学的なものの見方・考え方を育むことを目的として実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実施期間 8月～12月 ・ 参加者 小5～中3年生34名、高校生部5名 ・ 研究テーマ エネルギー ・ 発表会 12月24日(月)、26日(水) 製作物とパネルによる展示及び実演を行った。 		
<p>(2) 保有する豊富な標本資料等の電子化を進め、マルチメディア技術とインターネット等の情報通信技術を活用して、学習資源として国民に提供すること。</p>	<p>2 - 1 科学博物館の活動を積極的に国内外に発信するため、魅力あるホームページ作り、英文での情報提供の充実などを図る。また、保有する標本資料等、豊富な学習資源をマルチメディア技術とインターネット等の情報通信技術を活用して、「魚類」「コケ類」「鉱物」「縄文人」「航空機・ロケット」などの教育用学習資源データベースを構築し、国民に提供する。</p>	<p>教育用学習資源データベースの構築・提供状況</p>	<p>定性的に記載 評価の観点例 ・教育用学習資源データベースの構築の取組は進んでいるか</p> <p>「バーチャルミュージアム開発特別委員会」を情報化委員会の下に設置し、学習資源コンテンツの開発に着手し、教育用学習資源として以下のコンテンツを作成・公開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 科博に展示されている恐竜アパトサウルスの化石を解体し、公開研究調査した模様を海外研究者のインタビューなどを交え学習情報として提供する「アパトサウルス公開研究ページ」を作成・公開した。 ・ 「情報世紀の主役たち」、「イタリア科学とテクノロジーの世界」、「日本人はるかな旅展」をパノラマ画像と解説を提供するバーチャル特別展ホームページを作成・公開した。 ・ 科博に寄せられた宇宙に関する質問に、画像やわかりやすい解説で回答した「宇宙の質問箱」ページを作成・公開した。 	<p>B</p>	
<p>(3) ホームページのアクセス件数については、平成17年度に60万件以上を達成するなどインターネット等を活用して情報の積極的な発信に努め、博物館事業についての広報活動の充実を図る。</p>	<p>3 - 1 ホームページによる博物館事業に関する情報等の充実を図る。</p>	<p>ホームページ充実への取組状況 ()</p>	<p>定性的に記載(ホームページアクセス件数、ホームページ上に公開した標本資料情報数及びこれらの前年度実績を併記) 評価の観点例 ・ホームページによる情報提供内容の充実は図られているか ・ホームページアクセス件数は、前年度に比してどのような状況か。</p> <p>ホームページのデザイン、内容をリニューアルし、英文ホームページを充実し公開するとともに、次のコンテンツを作成公開した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 研究部の研究活動を紹介するページ 2) 特別展・企画展の展示会場の様子をパノラマ画像で紹介するバーチャル展示ホームページ <p>紹介した特別展・企画展は、「情報世紀の主役たち」、「イ</p>	<p>A</p>	<p>13年度～16年度は、定量的評価基準を設けず、定性的に評価する。17年度評価基準 A：60万件以上 B：54万件～60万件未満 C：54万件未満</p>

			<p>タリア科学とテクノロジーの世界」,「日本人はるかな旅展」 「化石の美と科学」。</p> <p>3) 宇宙の質問箱(Q & A)をモチーフとした天文電子博物館のページ</p> <p>4) 博物館クイズ等子どもを対象とした子どもホームページ</p> <p>5) 筑波実験植物園の企画展,今咲いている花の名前を紹介するページ</p> <p>特別企画展等の広報用のホームページを作成・公開し,広報活動を行った。</p> <p>13年度のアクセス数 555,953 件(前年度 346,613 件) 13年度のホームページに公開した標本資料情報数は, 184,620 件(前年度 139,882 件)</p>	
	<p>3 - 2 特別展等の開催時における展示内容及び館内教育普及活動の周知のために 科学博物館ニュース,ポスター,リーフレット,プレスリリース等により,教育委員会をはじめ社会教育施設,各小・中・高等学校,報道機関,旅行者等への積極的な情報の発信を図る。</p>	<p>広報活動状況</p>	<p><前出の「入館者数確保に向けた取組状況」として評価></p> <p>特別展等の広報活動 文部科学省記者会を通じて各報道機関に資料配布を行うとともに,関東地区の小中高等学校等にポスターやチラシを送付した。展覧会のテーマに応じて,関連団体や公共機関,マスコミ関係に対して積極的に戦略的な広報に取り組み,広報資料等を配布した。</p> <p>個別の取組状況は,下記のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特別企画展[情報世紀の主役たち] 情報関連団体,情報処理関係学会への資料配付を実施した。また,旅行者にゴールデンウィークキャンペーン用としてチラシ 2,000 部を配布した。 ・ 特別展[イタリア 科学とテクノロジーの世界] 1都3県小・中・高等学校の各学級数分,また,科学系博物館及び協賛関係企業等にチラシ 40 万部を配布した。 共催の日本経済新聞社を中心に社告,特集記事,関連記事を掲載するとともに,交通広告を JR,都営地下鉄・バスで実施した。 ・ 特別展[日本人はるかな旅展] 画廊,画材店及びカルチャーセンター等にポスター,チラシを配布した。共催の NHK で「NHK スペシャル - 日本人はるかな旅 - 」を放映するとともに,交通広告を JR,営団地下鉄,小田急線,京王線で実施した。 ・ 企画展[日本の博物図譜] 美術館,専門学校(デザイン・芸術系)への資料配付を実施した。 ・ 特別企画展[化石の美と科学] 画廊,専門学校(デザイン・芸術系),大学・短大(芸術系)への資料配付を実施した。また,第 10 回国際化石鉱物ショー会場でのチラシ 8,000 部を配布した。交通広告を都営地下鉄・バスで実施した。 ・ 企画展[ノーベル賞 100 周年記念展] 都内国公立大学,大学院及びノーベル賞受賞者関係大学へ資料配布を実施した。また,交通広告を JR,都営地下鉄・バス,京成線で実施した。 	

(4) 児童・生徒等の自然科学への興味・関心を高めるため、貸出用教材実習セットの新たな開発により学校等への貸し出し件数の増を図るなど、学校との連携を強化すること。

4 - 1 学校教員に対し、理科教育における科学博物館の効果的な活用法に関する相談等の機能を充実するとともに、展示や実験室等を活用した教育プログラムを開発することにより、学校との連携を通じ、児童・生徒に対する効果的な学習を促進する。

ティーチャーズセンターにおける相談等の状況

定性的に記載
(ティーチャーズセンターにおける相談件数及び前年度実績を併記)

評価の観点例
・ティーチャーズセンターにおける取組は、どのような改善が図られているか。

13年2月に科博の教育的利用を促進するマニュアルとして「教師のための国立科学博物館利用案内」を作成し、ティーチャーズセンターで相談者に配布するとともに、近隣の小中高等学校、全国科学系博物館、全国中学校理科教育研究大会に配布した。また、13年度新たにホームページにも掲載した。

また、事前相談の中で近年急速に増えつつある、「子どもたちに一般見学以外に体験的な学習をさせたい」との教員の要望に応えるため、団体対象の科学体験プログラム(教育普及官が指導)の紹介とその相談に努めた。その結果ティーチャーズセンターを通して体験的な学習をした団体は、64団体3,098人(前年度62団体2,645人)であった。

なお、利用・相談状況は以下のとおり。

13年度の利用・相談件数は544件(東京都内:267件(49%))
(前年度669件(東京都内:321件(48%)))

平成13年度の利用団体区分	
幼稚園・保育園	70件
小学校	186件
中学校	150件
高等学校	36件
養護学校	42件
その他	60件
計	544件

その他には公民館、児童館、アメリカンスクール、教育センター、学童クラブ、企業研修、福祉センター、専門学校、親の会などが含まれる。

なお、東京都内の小学校は約1,380校(理科専任は約1,380人程度)、中学校は約700校(理科専任は約1,400人程度)である。

教育プログラムの開発状況

定性的に記載

(教育プログラムの開発件数及び前年度実績を併記)
評価の観点例
・教育プログラム開発の取組はどのような状況か

かはくたんけん教室での指導展開を中心に、新プログラムを実施するとともに、既存のプログラム31件のうち、約半数の15件について改善した。教育プログラムの開発に当たっては、学校教育における教材、教授法等を参考にするとともに、博物館

B A

A

			<p>独自の学習環境に適した教材，教授法を取り入れた。</p> <p>また，教育プログラムを開発するため，つくば市立吾妻小学校を「筑波実験植物園を活用した学校教育のあり方について」の調査協力校に委嘱し，14年度から教育プログラムの開発を行う。</p> <p>13年度の開発件数 12件（前年度 11件）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自然史系のプログラム 6件 ・ 理工系のプログラム 6件 		
	4 - 2 貸出用教材実習セットを毎年新規開発し，これらを学校や博物館等社会教育施設に積極的に貸し出すことにより，日頃実物標本に接する機会の少ない児童・生徒等に対する教育活動を支援する。	貸出用教材セットの貸出し状況	<p>定性的に記載 （教育用標本の貸出し件数及び前年度実績を併記）</p> <p>評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育用標本の貸出し状況はどうか ・ 教育用貸出し標本セットの新たな開発は行われているか <p>学校や公民館等の社会教育施設などに対し，化石，貝，岩石鉱物，隕石などの標本セットを無料で貸出しを行っており，13年度は前年度と比べ 30% 増の 47 件の貸出しを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 貸出し件数 47 件（前年度 36 件） <p>新たに，アンモナイト化石の貸出し用教材学習セットを開発した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 石膏及び樹脂用レプリカ標本セット ・ 低融点樹脂用レプリカ標本セット 		A
	4 - 3 教育関連機関及び企業の研究者等で，自然科学や科学技術の実験や講演を希望する方々をサイエンスボランティアとして登録し，登録者の情報を，学校，博物館，公民館等にインターネットにより提供する。	サイエンスボランティアの情報提供の状況	<p>定性的に記載 （サイエンスボランティア情報提供のアクセス件数及び前年度実績を併記）</p> <p>評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サイエンスボランティア情報提供の利用件数（アクセス件数）はどのような状況か <p>自然科学や科学技術の楽しさ，面白さ，すばらしさを実験や講演を通して人々に伝えていくことを希望する教育関連機関及び企業の研究者等を「サイエンスボランティア」として登録し，その情報を 13 年度から新たにインターネットにより提供した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 13 年度末の登録者数 498 名 ・ 13 年度中のインターネットアクセス数 1,803 件 		A
(5) 入館者に対する展示等の案内，相談，児童・生徒などへの指導助言，教育普及活動における援助等を行う教育ボランティアの活動の充実を図ることにより，入館者へのサービスの向上に努めること。	5 - 1 展示室におけるガイドツアー，フロアガイドの導入等，教育ボランティアの活動の場を拡大することにより，入館者へのサービスの充実に努める。	教育ボランティアの活動状況	<p>定性的に記載 （教育ボランティアの登録者数，1日当たり平均活動者数及びこれらの前年度実績を併記）</p> <p>評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育ボランティアの活動はどのような状況か <p>教育ボランティア制度は，昭和 61 年日本で初めて科博で導入した制度で，様々な知識・技術・体験等を持つ者に博物館と入館者との橋渡しの役割を担ってもらい，博物館の活性化を図るとともに，ボランティア活動を通して学習を深め，生涯学習</p>		A A

の場を提供するものである。科博の教育ボランティアの活動は、日本における博物館ボランティアとして際だって活発な活動を展開している。さらに、近年はボランティアの専門性、創造性を活かす活動を試み、博物館ボランティアのモデル的、先導的役割を果たしている。

13年度は、博物館活動の充実を図るとともに、生涯学習の促進を図るため、上野本館だけでなく他の地区でもボランティアを導入できるようにした。

この改正を受け、筑波実験植物園では、14年10月からの植物園ボランティア導入を目指し、希望者の募集を行い35名が研修を受けている。

また、入館者サービスの向上のため、13年度から教育ボランティアの新たな活動として、展示室ガイドによる展示案内・説明を開始した。

- ・ 教育ボランティアの登録者数 227名(前年度 223名)
- ・ 1日当たり平均活動者数 33.7名(前年度 33.7名)

教育ボランティアの活動

(1) 毎日実施する活動

- ・ たんけん広場における指導助言
- ・ 探究コーナーにおける指導助言
- ・ おし葉のコーナーにおける指導助言
- ・ 案内所における来観者への案内、見学相談への対応
- ・ 読書コーナーの運営、資料の案内・情報提供
- ・ サイエンスシアターにおける入場者の整理・誘導・説明
- ・ ティーチャーズセンターにおける事前見学相談への対応
- ・ ガイドツアーによる展示案内、説明
- ・ 展示室ガイドによる展示案内、説明

(2) 特定の時期に実施する活動

- ・ 教育普及活動における準備、受付、指導補助、引率等
- ・ ミュージアムアドベンチャー(第2,4土曜)におけるワークシートの製作、青少年への指導助言
- ・ 夏休みサイエンススクエアにおける指導助言
- ・ 特別展、特別企画展、企画展における参加体験型展示などの案内、説明
- ・ こどもの日特別企画における企画、準備、指導助言

(3) その他の活動

- ・ 森の標本箱の整備・製作とその活用による指導助言
- ・ 月刊誌『国立科学博物館ニュース』の朗読録音と視覚障害者への貸出し
- ・ 障害者、外国人等の見学に対する援助活動

5 - 2
教育ボランティアの資質向上を図るための研修を毎年2回実施する。

研修の実施回数

2回以上	1回	0回	5回実施
------	----	----	------

A

研修の実施状況

定性的に記載
(研修の参加者数及び前年度実績を併記)
評価の観点例
・ 教育ボランティア研修の取組はどのような状況か

A

			<p>教育ボランティアとしての活動を円滑かつ合理的に推進するために、次の研修を実施した。</p> <p>(1) 教育ボランティア研修 2回(前年度2回) 教育ボランティアとしての資質の向上を目的として、展示室ガイド活動の研修を、1回(6日間)を2回実施。</p> <p>(2) 教育ボランティア志望者研修 1回(前年度1回) 教育ボランティアの登録前に基礎的な研修を実施し、受講した者を登録した。</p> <p>(3) 特別展等活動者研修 2回 特別展「イタリア 科学とテクノロジー」、特別企画展「化石の美と科学」で活動するための研修を実施した。</p> <p>筑波実験植物園においては、14年10月から植物園ボランティア導入を目指し、14年3月から志望者に対し研修を開始した。</p>						
<p>5 研修事業の充実 (1) 博物館職員等、科学活動指導者の資質向上を図るための研修を実施すること。実施にあたっては、適宜研修内容を見直すとともに、内容の充実に努めること。 また、衛星通信等多様なメディアを活用すること。</p>	<p>5 研修事業の充実 1 - 1 博物館職員、学校教員、青少年教育施設等の指導者を対象とした現職研修として「ミュージアム・マネージメント研修」「学芸員専門研修アドバンスト・コース」、 「理科担当教員研修」等を実施する。</p>	<p>研修事業の実施状況</p>	<p>定性的に記載 評価の観点例 ・研修事業の取組はどのような状況か</p> <p>博物館職員、学校教員、青少年教育施設等の指導者等の資質向上を図るため、次の研修等を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博物館職員を対象とした研修 「学芸員専門研修アドバンストコース」動物・植物・地学の選択3専門講座と総合講座 受講者24名(前年度17名) ・博物館管理部門職員を対象した研修 「ミュージアム・マネージメント研修」受講者63名(前年度75名) ・理科担当教員を対象とした研修 「理科担当教員研修」動物、植物、地学、人類コース 受講者70名(前年度71名) ・科学教育に携わる教員、学芸員、青少年教育施設の科学教育指導者を対象とした研修 「科学教育指導者研修」5講座 受講者139名(前年度124名) 	<p>A A</p>					
	<p>1 - 2 学芸員資格取得を目指す学芸員実習生の受入指導を行う。科学博物館の人的資源、施設等を最大限に生かし、各大学の要請を踏まえ毎年240名を受け入れる。</p>	<p>博物館実習生の受入数</p>	<table border="1"> <tr> <td>240人以上</td> <td>220人 ~ 240人 未満</td> <td>220人 未満</td> <td>49大学 237人</td> </tr> </table> <p>(受入申請は241名あったが、4名の辞退者があった。)</p>	240人以上	220人 ~ 240人 未満	220人 未満	49大学 237人	<p>B</p>	
240人以上	220人 ~ 240人 未満	220人 未満	49大学 237人						
	<p>1 - 3 衛星通信等を活用するなど参加・利用しやすい研修プログラムを提供する。</p>	<p>衛星通信等の活用状況</p>	<p>定性的に記載 (提供した研修プログラム数及び前年度実績を併記) 評価の観点例 ・衛星通信等の活用はどのような状況か ノーベル化学賞受賞者白川英樹博士による記念講演「化学と</p>	<p>A</p>					

			<p>私」, 科学史学校, ミュージアム・マネージメント研修, 学芸員専門研修アドバンスト・コースなど, 科博主催による教育プログラム提供を 31 番組実施した。(前年度 28 番組)</p> <p>このほか, 国立オリンピック記念青少年総合センターから送信する「子ども放送局」の番組「研究室におじゃまします」の企画を担当し, 5 本の番組を制作し, 提供した。</p>		
<p>6 科学系博物館のナショナルセンター機能の充実</p> <p>(1) シンポジウムや共同研究を積極的に行い, 国内外における自然史研究者・学会との連携を深め我が国の自然史研究を強化すること。</p>	<p>1 - 4 地域における理科教員等科学指導者の資質向上を図るため, 各地の科学系博物館等と連携し, 毎年 2 回の出前研修講座を実施する。</p> <p>6 科学系博物館のナショナルセンター機能の充実</p> <p>1 - 1 シンポジウムや共同研究を積極的に行い, 国内外における自然史研究者との交流を図るなど連携を深め, 自然史系博物館等, 研究機関のネットワークを通じて我が国の自然史研究を強化する。</p>	<p>出前研修講座の実施回数</p> <p>シンポジウムや共同研究の実施状況</p>	<p>2 回以上 1 回 0 回 2 回実施</p> <p>山梨県立科学館 13.7.31 ~ 8.1(参加者数 31 名), 三重県立博物館 13.8.7 ~ 8(参加者数 26 名)</p> <p><前出の「共同研究等の状況」として評価> <全体評価の「ナショナルセンター機能」として評価></p> <p>セミナー「最新の科学動向と科学博物館の使命」をはじめ, 学会等の研究集会・シンポジウム等を 21 回実施した。(前年度 17 回)</p> <p>アジア及び環太平洋地域における自然史系博物館への研究協力事業の一環として海外の博物館等から研究者を招聘し, 東南アジアの自然史研究の現状や自然史系標本資料の管理・保管・利用に関するワークショップを開催した。</p>	<p>A</p>	
<p>(2) 大学院学生, 特別研究員等の受入の増を図ることにより, 自然史研究者等の若手研究者の人材育成, 後継者育成を進めていくこと。</p>	<p>1 - 2 自然史関連学会と協力し, 自然史研究の発展・充実に寄与する。</p> <p>2 - 1 連携大学院制度による学生の受け入れ拡充を図るとともに, 特別研究生・日本学術振興会特別研究員, 技術研修生の受入促進を図る。また, 連携大学院以外の自然史系の学部・研究科を持つ大学と協力し, 後継者養成の推進を図る。</p>	<p>関連学会への協力の状況</p> <p>後継者養成の取組状況</p>	<p><前出の「共同研究等の状況」として評価> 研究官が, 学術団体・学会の役員や委員として活動した他, 各種の自然史関連学会等と共催・協力し, 科博を会場として「日本分類学連合設立総会」, 「日本昆虫分類学会第 4 回大会」などの学会の大会等を行った。</p> <p>定性的に記載(受入学生数及び前年度実績を併記)</p> <p>評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後継者養成の取組はどのような状況か <p>分類学など自然史科学を担う次世代の研究者を専門に教育できる大学が少なくなり, 専門研究者の後継者養成が強く求められている。このため, 東京大学との連携大学院による院生を受入れているが, 分野に片寄りがあるため, 日本学術振興会特別研究員や, 独自の特別研究生制度を設け, 科博の人的・物的資源を最大限に活用して, 可能な限り受入れている。受入れた者に対しては, 次世代の自然史科学を担う研究者の育成を図るため, 専門的見地から研究指導・論文指導に当たっている。今後就職先の確保や, 研究室のスペース不足など課題も多いが, 後継者養成のための努力を継続する予定である。</p> <p>連携大学院</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻の修士課程 3 名, 博士課程 10 名, 計 13 名を受入れた。(前年度 13 名) ・ 14 年度から実施する茨城大学大学院農学研究科との連携大学院について, 協定書を締結した。 <p>日本学術振興会特別研究員 7 名を受入れた。(前年度 5 名)</p>	<p>A</p>	

<p>(3) 資料の収集・保管・展示及び教育普及事業等の博物館活動に関し、他の科学系博物館への支援を行うとともに、科学系博物館におけるネットワーク活動を推進することにより、全国の科学系博物館の活性化に寄与すること。</p>	<p>3 - 1 他の科学系博物館に対して専門的な助言や標本の貸出しなどによる援助を行うとともに、科学系博物館ネットワークの中核的な役割を担い、巡回展の実施などを通じ、全国の科学系博物館の活性化に貢献する。</p>	<p>全国の科学系博物館との協力状況</p>	<p>特別研究生 9名を受入れた。(前年度14名)</p> <p>定性的に記載(標本の貸出し件数及び前年度実績を併記)</p> <p>評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> 他の博物館に対する助言や巡回展などによる支援は図られているか 全国科学博物館協議会への協力はどのような状況か <p>全国の科学系博物館の活動を振興するため、専門的な助言、標本の貸出し、全国巡回展等について全国科学博物館協議会と共催で以下の事業を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 標本の貸出し:「青海町自然博物館」にカワネズミの剥製外34点を貸し出すなど19件104点(前年度27件77点)の貸出しを行った。 標本貸出し時の研究官の派遣:「兵庫県人と自然の博物館」に貸出し標本の展示手法等の専門的な助言を行った。他1館(前年度2館) 巡回展について <ul style="list-style-type: none"> 「数学と遊ぼう」:13年度に開催を希望した博物館等は、12館であったが、実施時期等の調整を行い、三重県立みえこどもの城など10館(前年度10館)で開催した。 「すばる望遠鏡」:13年度に開催を希望した博物館等は、13館であったが、実施時期等の調整を行い、福岡県青少年科学館など8館(前年度10館)で開催した。 「スポーツの科学」:13年8月から巡回を始め、稚内市教育委員会青少年科学館など5館で開催した。(13年度新規) 博物館職員の資質向上を目指した研修活動 <ul style="list-style-type: none"> 学芸員専門研修(アドバンスト・コース研修) <ul style="list-style-type: none"> 参加機関21,参加人数24人 海外科学系博物館視察研修 <ul style="list-style-type: none"> 参加館園等21,参加人数26人 博物館職員現職研修(ミュージアム・マネージメント研修) <ul style="list-style-type: none"> 参加機関60,参加者63人 ホームページ活用研修(基礎コース) <ul style="list-style-type: none"> 参加館30館,参加者30人 	<p>A</p>
<p>(4) 新たな学問分野としての産業技術史学の確立を視野に入れ、産業技術史資料のナショナルセンターとして、同資料の登録システムを確立すること。</p>	<p>4 - 1 産業技術の歴史を示す実物資料の調査を継続して行うとともに、その歩みを研究し、その成果を将来に伝える産業技術史資料に関するナショナルセンターとしての機能の充実を図る。</p>	<p>産業技術史資料に関するナショナルセンターに向けた取組状況</p>	<p>定性的に記載(産業技術史資料の調査・登録件数(新規・累積)を併記)</p> <p>評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> 産業技術史資料に関するナショナルセンターへの取組はどのような状況か <p>センターの組織、管理運営、産業技術史資料の登録制度について検討し、「登録」の有効性についての実証実験を行い、また、関連博物館との資料情報のネットワーク化を図るなどセンターの設置に向けた取組を行った。</p>	<p>A</p>

<p>(5) 海外の博物館との協力協定の締結等に積極的に取り組むなど、自然史研究等の国際交流・国際協力の充実強化を図ること。</p> <p>特に、アジア及び環太平洋地域における中核的拠点として、自然史博物館等への研究協力を実施して、この地域における自然史系博物館活動の発展のうえで先導的な役割を果たすこと。</p>	<p>5 - 1 国際深海掘削計画におけるアジアを代表する微古生物標本資料センターとして、アジア太平洋地域における博物館等との国際交流・協力の充実・強化に努める。</p> <p>5 - 2 諸外国の博物館等の求めに応じたインターンシップの受入などの国際交流を促進し、相互の運営、研究活動、展示、教育普及活動等の発展・充実に資する。</p> <p>5 - 3 アジア及び環太平洋地域の自然史系博物館等との研究者交流を通じ、標本収集のための協力体制を進展させ、当該国の標本保管・管理システムの確立を援助するとともに、これらの協力活動を通じてアジア及び環太平洋地域における中核的拠点として、この地域における自然史系博物館活動の発展に、先導的な役割を果たす。</p>	<p>自然史研究等の国際交流・国際協力の充実・強化に向けた活動状況</p>	<p>今年度の調査件数 751件 累計 6,571件</p> <p>定性的に記載 評価の観点例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アジア太平洋地域の中核的センターとしての機能を果たす取組はどのような状況か <p>自然史研究等の国際交流・国際協力の充実・強化を図るため、新たに次の博物館と協定を締結した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 韓国国立科学博物館と友好協定を締結(13年7月) ・ インドネシア地質研究開発センターと研究協力協定を締結(13年11月) <p>ブータン王立植物園の園内設計に係るマスタープラン作成に筑波実験植物園が協力した。</p> <p>国際的な博物館関係の会議等の活動では、特に次の会議等において、意見交換、情報交換、協議等幅広い活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際博物館会議(International Council of Museums(略称ICOM))の日本委員会委員長に館長が就任し、日本委員会の委員長として日本委員会の取りまとめや13年7月にスペインで開催されたICOM総会へ出席した。 ・ アジア太平洋地域科学館協会(Asia Pacific Network of Science and Technology Centres)の副会長に館長が就任した。 ・ オーストラリアで開催された世界科学館会議に普及部長が出席した。 <p>・ 研究活動、展示、教育普及活動等における国際交流はどのような状況か</p> <p>研究活動における国際交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際深海掘削計画における微古生物標本資料センターとして、約5,000枚の珪藻プレパラートを作成し、米国の国立自然史博物館、テキサスA&M大学、スクリップス海洋研究所、ネブラスカ大学、スイスのバーゼル自然史博物館及びニュージーランドの地質・原子力科学研究所に配布した。 ・ アパトサウルスに関するケンブリッジ大学との共同研究やインドネシア地質研究開発センターとの共同研究などを実施した。 ・ 従来から「アジア及び環太平洋地域における自然史系博物館との研究協力」積極的に進めており、13年度は、中国、韓国、台湾に6人の研究者を派遣し、調査研究を行った。また、派遣した3カ国から研究者を招聘し、共同研究を行うとともに、自然史研究の現状や自然史標本資料の管理や保管、利用に関するワークショップを開催した。 <p>海外の博物館等からの視察等</p>	<p>A</p>
---	---	---------------------------------------	--	----------

<p>(6) 全国の博物館等社会教育施設におけるボランティア活動の支援を図ること。</p>	<p>5 - 4 全国の博物館等社会教育施設におけるボランティア活動を支援するため、全国博物館ボランティア研究協議会を隔年で実施する。</p>	<p>全国博物館ボランティア研究協議会の実施状況</p>	<p>海外の博物館等から 69 人の視察・表敬訪問等を受入れた。 また、科博から 8 人を派遣し、海外の博物館事情等を調査するなど 相互理解を深めた。</p> <p>定性的に記載 (全国博物館ボランティア研究協議会の参加者数及び前年度実績を併記) 評価の観点例 ・全国博物館ボランティア研究協議会の取組状況はどうか</p> <p>第 4 回全国博物館ボランティア研究協議会を開催し、全国の博物館ボランティア及びボランティア活動担当者が、博物館におけるボランティア活動の一層の充実と普及のための課題について研究協議を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 13 年度参加者数 248名 ・ 前回(11年度)参加者数 222名 	<p>A</p>	
---	---	------------------------------	---	----------	--

- 1：評価基準の設定に当たっては、おおよそ
A：中期計画を十分に履行し、中期目標に向かって着実に成果を上げている B：中期計画をほぼ履行し、中期目標に向かって概ね成果を上げている
C：中期計画を十分には履行しておらず、中期目標達成のためには業務の改善が必要 を目安として設定する。
- 2：複数の指標を設定した場合には、複数の評定をまとめる必要がある。
- 3：必要に応じて、目標設定の妥当性についても総評を行う。

- <留意事項等記載事項例>
- ・「指標又は評価項目」に該当しないが優れた成果が得られたもの、力を入れたもの
 - ・実績が好ましくない場合の理由
 - ・改善すべき事項
 - ・海外の状況について参考となるものがある場合には付記